

髓

—— 理のない理性 ——

鞠久
類

目次

序文	2
朝のホームルーム	4
1 時間目 読み物「二通の手紙」	8
道徳ノート1 規則と思いやり	28
2 時間目 読み物「ネット将棋」	30
道徳ノート2 勝負と誇り	56
ワークシート1	58
3 時間目 読み物「ネット将棋」	64
道徳ノート3 言葉と気持ち	94
ワークシート2	96

序文

「道徳」とは、一体何なのだろうか。

私たちは、人生で幾度となくその問いの前に立たされる。白か黒かでは到底割り切れない問題に直面し、一つの正解などない現実の複雑さに戸惑う。しかし、教室という空間で「道徳」が語られるとき、その豊かさはしばしば色褪せてしまう。

いつしか私たちは、一つの「正しい答え」を探すようになってしまっていないだろうか。他者の意見を「間違い」と断じ、用意された「模範解答」に辿り着くことが、道徳を学ぶことだと錯覚してはいないだろうか。その結果、授業は思考の冒険ではなく、「正解」を探し当てただけのクイズと化する。

本書は、その現状に対する一つの応答であり、ささやかな挑戦でもある。

この物語の出発点として、道徳教育の基盤である文部科学省の教材『私たちの道

徳 中学校』を、真摯に向き合う対象として選んだ。そこに散りばめられた、人間社会の本質を突く豊かなテーマ群。その可能性を、教室の中で最大限に解き放つことはできないだろうか。

理論を語るだけでは、人の心は動かない。教育の真価は、生徒と教師が織りなす、予測不能で、生きた対話の中にこそ宿る。だからこそ本書は、論文ではなく「教育シミュレーション小説」という手法を選んだ。読者には、物語の教室の一員として授業を追体験してもらい、その中で登場人物たちと共に悩み、考え、自分自身の心と向き合ってほしい。

この物語が目指すのは、新たな「模範解答」の提示ではない。むしろ、その逆である。道徳とは、記憶すべき知識ではなく、変化し続ける状況の中で、その都度最適解を判断していく能力そのものである。本書が描く授業風景を通して、読者一人ひとりが、誰かに与えられたものではない、自分だけの「ものさし」を心の中に築き上げる一助となれたなら、作者としてこれ以上の喜びはない。

さあ、教室の扉を開こう。答えのない問いを巡る、私たちの授業が、今、始まる。

二〇二五年九月

鞠久 類

朝のホームルーム

ガラツと音を立てて扉が開く。先生が教壇に立つと、それまで少しざわついていた教室の空気がすっと澄んでいく。窓から差し込む温かな光は、生徒たちの真新しいノートを柔らかに照らしている。

「はい、じゃあちよつと早いけど席についてくれる?」

生徒たちの視線が、先生にまっすぐに集まる。

「これから道徳の授業が始まるわけやけど、その前に、このクラスの道徳の授業で大事にしてほしいルールのお話をしようと思う」

「みんな、道徳って一言で言うたら、何やと思う?」

突然の問いに、生徒たちは少し考え込むように首を傾げる。先生はその様子に優しく頷きながら、続けた。

「色んな答えがあると思うけど、道徳って一言で言うって『思いやり』のことやと僕は思う。互いのことを認め合い、想像し合って、自分も周りも、みんなが気持ちよく毎日を過ごせるようにする。それが、この授業で一番大切にしたいことや。そのために、この授業には大事な大前提が二つある」

先生は指を二本立てて見せる。

「二つ目。人によって考え方は違うってこと。これから色んなテーマで話し合っていく中で、隣の席の子が自分とは違う意見を出してくれるかもしれない。それを『間違いや』って否定するんやなくて、『そんな考え方もあるんやな』っていうふうに思ってほしいねん。『自分とは違う』ってのを認めることが、思いやりの第一歩やと思う」

先生の話に生徒たちは静かに頷く。

「ほんで二つ目。道徳に『模範解答』はないってこと。たった一つの絶対的な答えなんて、道徳にはないんや。たとえば、満員電車でお年寄りが乗ってきたら『席を譲ったほうが良さそう』って思ふかもしれない。『でも、ほんまにその人は譲られて嬉しいんやろうか』とか『満員電車で席を立てて譲るのは、周りに迷惑をかけへんやろうか』とか……そういうことを考えたら、『譲らへん』っていう判

断が最適解になることもあるのが分かると思う。みんなには、この授業でいろんな考えを深掘りして、場面に合わせた『最適解』を見つける力をつけてほしい」先生は教室全体をゆっくりと見渡し、最後ににこっと笑いかけた。

「だから、考え方の違いを恐れんと、安心して自分の言葉で話してな。みんなの意見を聞けるの、楽しみにしとるで」

優しい沈黙の中に、授業開始を告げるチャイムが響き渡る。

1 時間目 読み物 「二通の手紙」

社会の秩序を維持する「規則」と、個人の内なる声である「思いやり」。道德教育において、この二つの価値の対立は、避けては通れない普遍的なテーマである。

しかし、その探求はしばしば、「規則は守るべきものだ」という画一的な結論に回収されがちではないだろうか。規則の本質的な意味や、それが時に人の心を縛る可能性についての議論は、後景に迫いやられやすい。結果として、生徒たちは思考停止に陥り、授業は「正解が決まっているクイズ」と化してしまう。

この時間は、この古典的でありながら根深い問題を、一つの授業実践としてシミュレートする。題材は、文部科学省の教材『私たちの道徳』に掲載されている物語、「二通の手紙」である。

規則を絶対的な善悪の基準として捉えるのではなく、それが「誰を、何から守る

ために存在するのか」という機能的な視点から再評価する。その上で、生徒たちが状況に応じた「最適解」を自ら思考する能力を、いかにして育むことができるのか。そのプロセスを、教室の対話の中に探っていく。

「はい、じゃあ道徳の授業を始めていきます。お願いします」

先生の言葉に生徒たちは立ち上がり、頭を下げる。

「お願いします」

凜とした、それでいて温かな声が教室に満ちた。

「今日は『二通の手紙』っていう読み物でいろいろ考えていこう」

先生はそう言うと、教科書を開くよう促した。

「教科書、140ページ開いてくれる？　まずは僕が読んでいくから、カギになりそうなどところに印をつけたりしながら確認してな。『二通の手紙』」

先生の落ち着いた声が、物語を紡ぎ始める。規則、優しさ、そして二通の手紙をめぐる、ある動物園の入園係の話だ。

物語が終盤に差し掛かったとき、一番最初に、小さく息をのんだのは陽奈だった。明るい彼女の表情が曇り、隣の席の美緒の袖をくいつと引く。

「ねえ……元さん、可哀想じゃない……？」

ささやかれた美緒は、悲しそうな顔でこくんと頷いた。

「うん……なんだか、切ないね……」

一方、物静かな大輝は、黙って教科書の挿絵をじっと見つめている。彼は指でそっと、感謝の手紙をなぞった。そして、少し離れた席では、拓也が「うーん……」と考え込むように腕を組んでいる。その表情は、納得のいかないような、複雑な色を浮かべていた。

先生が教科書を置き、ゆっくりと生徒たちを見渡した。

「そうやなあ、まずはお話の感想を聞いてみようかな。誰でも思ったこと自由に言ってみて」

その言葉に、生徒たちは少し顔を見合わせ、誰が話すかを探り合っている。静寂を破って、ぱっと手を挙げたのは陽奈だった。

「はい！ ああ、なんか、元さんが可哀想だなんて思いました。だって、困ってる姉弟を助けてあげただけなのに、停職になっちゃうなんて酷いと思います。お母

さん、あんなに感謝してたのに……」

隣の美緒が優しく頷きながら、それに続ける。

「私も……そう思う。お母さんからのお手紙はすごく温かいのに、もう一通の『懲戒処分』っていう手紙はすごく冷たくて……。二つが並んでいるのを想像したら、なんだか胸が苦しくなりました」

腕を組んでいた拓也が、少し違う角度から口を開いた。

「うーん……。でも、元さんが園の規則を破ったのは事実だよな。もし、あの子たちが池で事故にでも遭ってたら、もっと大変なことになってたわけで……。だから、動物園が処分するっていう判断も、分からなくはないかなって。……でも、そう思うと、感謝の手紙があるから、すごい複雑な気持ちになる……」

拓也の現実的な言葉に、教室が少し静かになる。みんながその言葉の意味を考えていると、今まで黙って話を聞いていた大輝が、ぽつりとつぶやいた。

「……元さん、最後は『晴れ晴れとした顔』だったんだ……。なんで、あんな顔になれたんだろうって……。それが一番気になりました」

「おっしや、みんな発表ありがとうな。うん、なんか切なくなるよな。あとでみんなでじっくり考えてみよか」

先生は一人ひとりの意見を受け止め、優しく微笑んだ。

「じゃあ、前から一個ずつ見ていってみよう。……『規則』ってのがポイントになってきそうやな。佐々木さんと山田さん、どっちが正しいってわけではない。どっちも信念に基づく行動やから。ここでは、その行動の『善悪』ではなく、

『規則に従うこと』に焦点を当ててお話を解きほぐしていこう」

先生がこの時間のテーマを示すと、生徒たちの間にわずかな変化が起きた。

「どっちが正しいとかじゃないんだ……」

陽奈が呟く。拓也はそれまで組んでいた腕をほどき、少し身を乗り出したように見える。「規則」という、より具体的なテーマに興味を引かれたようだ。

「回想の場面に行ってみよう。……この場面、行動としては姉弟を『入れてあげる』『帰す』の二通りある。自分ならどっちの行動をとるか、考えを言ってみてか」

「自分ならどうするか」という問いかけに、教室は自分事として考えるための静けさに包まれる。

一番に「はい！」と手を挙げたのは、やはり陽奈だった。

「私は、絶対に入れてあげます！　だって、弟の誕生日なんでしょ？　それなのに

泣きそうな顔してたら、可哀想すぎるもん。規則も大事かもしれないけど、それで子どもの誕生日を台無しにするのは、なんか違う気がする！」

美緒も、陽奈に同意するように、でも静かに話し始める。

「私も、入れてあげると思います……。女の子が、入園料をぎゅっと握りしめてたって書いてあったし……。その子の『弟に見せてあげたい』っていう優しい気持ちを考えたら、規則だからって断るのは、私にはできないかも……」

二人が「入れてあげる」という意見を述べた後、拓也が、少し難しい顔をしながら口を開いた。

「俺は……規則通り、帰すと思う。……気持ちには分かるけど、結果的に元さんは停職処分になってる。それに、子どもたちも園の中で迷子になって、大騒ぎになったわけだし。その場の優しさが、後でもっと大きな迷惑とか、もしかしたら事故に繋がったかもしれない。そう考えると、やっぱり決められた規則には従うべきなんじゃないかな」

拓也の意見に、陽奈や美緒は少し複雑な表情をしている。最後に、ずっと黙って考えていた大輝が、ゆっくりと顔を上げた。

「……どっちが正しいかは、分からないです。でも、元さんは何日もあの子たちの

様子を見てた。ただの『お客さん』じゃなかったんだと思う。だから、『規則』よりも目の前の二人の気持ちを優先した……。自分だったら、その場でどっちの判断ができるか……自信がないです」

「みんなそれぞれ良い意見言うてくれたな。特に大輝くん。『その場で判断できる自信がない』ってのも立派な意見や。難しいもんな」

先生は、大輝の意見を優しく包み込んだ。さらに、佐々木さんの立場が過去と現在で変わったことに触れ、考えは変わっていくものだと言加えた。その指摘に、拓也がハッと表情で口を開く。

「ああ、なるほど……。佐々木さんは、元さんの『事件』を全部見てたから……。優しい気持ちで規則を破った結果、元さんが停職になって、大騒ぎになったのを知ってる。だから、今の佐々木さんは、数年前とは違って『帰す』立場になったってことか……」

拓也の言葉に、陽奈や美緒も「そっか……」と、佐々木さんへの印象が変わり始めているようだ。

「そうやな。佐々木さんの立場が変わったのは『事件』に遭遇したからや。『事件』の始まりは、元さんが規則を破ったところやったな。ほなら、元さんが破った規

則ってなんやっただけ？」

先生が尋ねると、拓也がすぐに手を挙げた。

「はい。二つあると思います。一つは『入園時間が過ぎていたこと』。もう一つは『小学生以下の子供は、保護者同伴でなければならぬこと』です」

「そうやな、元さん、一つどころか二つも規則破ってもうたんや。……これによって『失踪』っていう事件が起こったわけで、事故につながる可能性もあったんやな。どんな事故が想定できる？」

先生が尋ねると、教室の空気が少し引き締まった。

「はい。……もし、池に落ちて溺れていたら、と一番に思いました。閉園後で誰もいないから、誰も助けられない状況だったと思います」

拓也の言葉に、陽奈も顔をこわばらせて続ける。

「危ない動物の檻に近づいちゃって、もし手の中に入れて噛まれたりしたら……とか！ 暗くてよく見えなかったりしたら、危ない！」

美緒は、二人の身体的な危険とは少し違う視点から、怯えるように言った。

「それに、どんどん暗くなって帰り道も分からなくなっていく……。見つからなかったら、二人だけで夜を過ごすことになったかもしれないって思うと……すごく怖

かったんじゃないかなって……」

「そうやな、考えれば考えるほど怖くなってくるな」

次々と浮かび上がる可能性に、生徒たちは皆、こわばった表情で深く頷いている。教室全体が、「規則」とは、ただ人を締め出す冷たいものではなく、皆を守るためにあるのかもしれない、という空気に包まれ始めた。

「じゃあ、言語化してみよう。……『規則ってなんのためにあるんだろうか』」

授業の核心に迫る問いに、最初に手を挙げたのは、拓也だった。

「はい。……さっきみんなで考えたみたいなの、危ない事故が起きないようにするため、だと思います。利用する人みんなが安全に過ごせるように、一番悪い結果を避けるためにあるのが、規則なんだと思います」

続いて、美緒が静かに言葉を添える。

「私も、拓也くんと似ています。みんなが悲しい気持ちや怖い思いをしないで、安心して楽しく過ごせるように……。そのためにあるのかなって思いました」

最後に、一番気持ちの変化が大きかった陽奈が、自分の意見を確かめるように言った。

「……うん。私もそう思う。最初は、ただ厳しいだけって思ったけど……そうじゃ

なくて、みんなをちゃんと守るためにあるんだって……。だから、規則を守る
ことって、本当は……優しいこと、なのかなって……思いました」

「みんな良い気付きや。ほなら、視点を変えてみよう。『規則は絶対に守らなければ
ならないものか』」

さっきの結論を揺さぶるような問いに、教室は再び深い思考の沈黙に包まれた。

「はい、僕は絶対だと思います」

一貫して規則の重要性を説いてきた拓也が、きっぱりと言った。

「もし『この場合は守らなくてもいい』っていう例外を一度でも認めたら、規則は
どんどん意味がなくなっていくと思うから。みんなを平等に、安全に守るため
に、誰にとっても絶対であるべきだと思います」

その明確な意見に対し、陽奈はとても困った顔で首をひねる。

「ええ……難しい……。さっき規則を守るのが優しさだって思ったけど……。で
も、元さんが規則を破ったのも、あの子たちにとっては優しさだったし……。
うーん……『絶対』って言われると……時と場合による、のかなあ……？ 分か
らないです……」

陽奈の葛藤を引き継ぐように、美緒が言葉を探しながら話す。

「基本的には守るべきだと思います。でも……。元さんは、あの子たちの事情を知ってたから、規則よりも気持ちを優先したんだと思うんです。規則だけでは判断できない、その人の心を考えなきゃいけないときも、もしかしたらあるのになって……」

最後に、ずっと天井のあたりを見て考えていた大輝が、静かに、でもはっきりとした口調で言った。

「……規則は、たぶん『みんな』のためであって、元さんの優しさは、目の前の『二人』のためにあったんだと思います。……元さんは、『みんな』のための規則を破って、『二人』を選んだ。そして、その結果から逃げずに、全部自分で引き受けた……。だから……守らなくてもいいときもあるのかもしれないけど、それには、元さんみたいな『覚悟』が必要なんじゃないかと思います」

「みんなそれぞれ違うけど全部良い考えや。これまで僕は『AかBか』みたいな問いかけをしてたけど『答え』はないねん。同じく『絶対』もないんや。大輝くんは『自信がない』『覚悟が必要』みたいな第三の案を発表してくれた。これもめちゃくちゃ素晴らしい答えなんや。AでもBでもないCが答えになるときもある。これが道徳や。陽奈さんや美緒さんの『時と場合による』っていう考えも大

事やな」

先生が議論を優しくまとめると、生徒たちは安堵と納得が入り混じったような、穏やかな表情になる。

「じゃあ、『罰』について考えてみようか。元さんは『懲戒処分』を受けた。これって一種の『罰』やんな。『罰』ってなんのためにあるんやろうか」

拓也が答える。

「規則を『ただの言葉』で終わらせないため、だと思います。もし規則を破っても罰がなかったら、誰も真剣に守らなくなる。だから、『これを破ったらこうなる』という結果を示すことで、社会の秩序を守るためにあるんだと思います」
陽奈がそれに続く。

「うーん……自分がやったことが、良くないことだったんだって、ちゃんと考えられるようにするため……かな？」

美緒も、公平さや、間違いを示す意味があるのではないかと意見を述べた。そして大輝が、自らの言葉で締めくくった。

「……元さんは、罰を受けることも覚悟の一部だったんだと思います。だから、罰は……自分がした選択の『責任』を、ちゃんと形として引き受けるためにあるん

じゃないか、と思いました」

「ありがとう。みんなしっかり考えて言葉にしてくれたな」

先生は満足そうに頷き、自身の考えを静かに語り始めた。

「僕は『罰』は『許し』への準備やと考えてる。許すために罰する。罰することで機会を与えてる。そう思うな」

その言葉に、生徒たちはハツとして顔を上げた。大輝は目を見開き、先生の言葉を深く味わうように聞いている。「責任」の先に「許し」があるという考えが、彼の中で大きな意味を持ったようだ。

「じゃあ、これを踏まえて、元さんの受けた『懲戒処分』っていう罰は正当な処分やろうか」

「正当じゃないです！　だって、元さんは優しさで行動しただけなのに、罰を受けるなんておかしいです！　感謝の手紙ももらえてるんだから、むしろ褒められるべきだと思います！」

先生の問いかけに、陽奈が強い口調で答えた。拓也は規則との関連を考える。

「僕は、正当だと思います。園には園の安全を守る責任がある。元さんの行動は、結果的に子どもたちを危険に晒しました。もし事故が起きていたら、園全体の責

任問題になります。個人の感情や優しさとは別に、組織としてのルールを破った以上、処分は妥当です」

大輝も静かに話す。

「処分はするべきかもしれないけど、『懲戒処分』は重すぎる気もします……。規則を破ったのは事実ですが、嚴重注意とか、もっと軽い形でもよかったんじゃないかなって……。感謝の手紙っていうプラスの側面も考慮してほしかったです……」

美緒も迷いながら口を開く。

「私も、重すぎる気がします……。元さんの優しい気持ちを考えて、罰を与えるのは可哀想です。でも、拓也くんの言うように、もし事故が起きていたらと思うと……。すごく、判断が難しいです」

「そうやな。優しさを考えてと重すぎる気もするかもしれへん。でも、園側も『優しさ』は考慮してると思うねん。園としては、この元さんの判断や行動が死亡事故のような重大な問題に発展した可能性を、『優しさ』以上に重く受け止めてこの処分を下したんとかうかな」

その言葉で、生徒たちは「優しさ」では済まされないような重大な問題があるこ

とに気付いた。

「それでも、元さんは『晴れ晴れとした顔』やったよな。なんでやろうか」

先生の問いかけに陽奈が答える。

「自分のしたことに後悔がなかったからだと思います！ 停職にはなっちゃったけど、困っていた姉弟を助けてあげられた。その『良いことをした』っていう満足感で、心がスッキリしたんじゃないかな！」

美緒も続く。

「感謝の手紙を読んだからだだと思います……。自分の行動が、あのお母さんや子どもたちにちゃんと届いて、あんなに温かい言葉を貰えた。だから、処分された悲しさよりも、人の役に立てた喜びの方が大きかったんだと思います」

拓也と大輝は責任に注目する。

「自分の行動が招いた『結果』のすべてを受け入れたからだと思います。子どもたちを助けたというプラスの結果と、規則を破って処分されるというマイナスの結果。その両方から逃げずに責任を取ったことで、一つの区切りがついて、気持ち整理されたのではないでしょうか」

「『罰』を受けることも含めて、自分の信念を貫き通したからだと思います。元さん

にとつては、規則よりも目の前の子どもたちを助けることの方が大切だった。その自分の信じる正義を最後までやり遂げたから、清々しい気持ちになれたんだと思います」

「たぶん、満足感だけやと『晴れ晴れとした顔』とは違う表情になると思うねん。たぶん元さんは自分のした事の重大さを理解していたから、処分を受けることで責任を取った。大輝くんや拓也くんが言ってくれたみたいに、処分を受けることも含めて自分の信念に基づいていたからこそ、後悔がなく『晴れ晴れとした顔』になったんとちゃうやろか」

生徒たちは静かに頷く。「覚悟」と「責任」が生徒たちの中で結びついたようだ。「ほなら最後に訊くわな。お母さんからの手紙の内容について、みんなどう思う？」先生からの問いに、生徒たちは教科書の手紙を読み返す。

「はい……。すごく切ない手紙だなんて思いました」

一番に口を開いたのは美緒だった。

続いて陽奈が、少し興奮したように付け加える。

「私は、この手紙を読んだら、やっぱり元さんがしたことは間違ってたんだって思いました！」

二人の意見を聞いていた拓也が冷静に分析し、最後に大輝が「『あの子たちの夢を大切に思ってください』っていう言葉が、一番心に残りました」と、一つの言葉を拾い上げた。

生徒たちの共感的な意見が出揃ったところで、先生が静かに、しかし鋭い一石を投じた。

「だいぶ意地悪に思われるかもしれへんけど、僕的には『なんや、この文章』って思った」

その言葉に、教室の空気が一変した。陽奈と美緒は、戸惑いを隠せないでいる。「もちろん、謝罪と感謝を入れてる点では十分な手紙かもしれへん。でもこの手紙、読んだときに『温かい家庭像』が強く印象に残らへんやろか？『動物園での迷惑への謝罪』が『楽しそうな家庭での様子』にかき消されてる感じ。……もつと言うと、僕には『言い訳と感動』の手紙にすら見えてしまう。これって、もうちょっと伝え方が工夫できるんじゃないかな」

先生の示したこの新しい視点に最初に食いついたのは拓也だった。

「なるほど……。『温かい家庭』を強調することで、元さんがしたことの『正当性』をアピールしてる、みたい……。言われてみれば、確かにそういう読み方もで

きますね……」

しかし、大輝は少し違う考えを巡らせていたようだ。

「……僕は、意地悪だとは思いませんでした。お母さんにとっては、謝らなきゃいけないっていう気持ちよりも、感謝を伝えたいっていう気持ちのほうが、ずっと大きかったんだと思います。……だから、自然と感謝の言葉のほうが多くなっただけじゃないかなって……」

生徒たちがそれぞれの考えを巡らせる中、先生は教科書を手に取り、手紙の最後の部分を少し変えて読んでみせた。

『……大変なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。また、かけがえのない思い出を作っていただき、本当にありがとうございました』……どうやらか。最後の文をいじっただけなんやけど、印象違ってこうへんかな?」

生徒たちは「ああ……」と、感嘆とも納得ともつかない声を漏らした。たった一文で、手紙の空気ががらりと変わったのを感じ取っている。

「わ、全然違います!『ごめんなさい!』と『ありがとう!』がちやんと分かれてるから、すごく分かりやすい!」

陽奈が目を丸くして言った。拓也も、その違いを分析的に指摘する。

「最後にもう一度はつきりと謝罪の言葉で締めることで、手紙全体の印象が引き締まりました。これなら、誰が読んでも言い訳だとは思われにくいですね」

そして最後に、大輝がこの変化の本質を静かに語った。

「……前の手紙は、元さんの心だけに向けた、個人的な手紙だったんだと思います。先生が直したこっちの手紙は、元さんだけでなく、動物園っていう『社会』にも向けた、公的な手紙になってる感じがします。……個人の気持ちと、社会的な責任の、両方のバランスが取れてる。……凄いいと思いました」

「今日やったのは『規則と罰』についてやった。でも最後にやった『たった一文での印象の変化』についても頭の片隅に入れておいて。『伝えたいことを正しく伝える』ってのも道徳において必要になってくるからな」

先生のそのメッセージに、生徒たちは深く頷く。

先生が授業のまとめを黒板に書くように一つずつ読み上げ、感想を書くよう指示すると、教室にはカリカリという鉛筆の音だけが響いた。

「よし、ちょうど時間やな。道徳の授業を終わります。ありがとうございました」

先生の挨拶に陽奈がはっとしたように顔を上げ、クラスの代表のように声を張った。

「起立！」

その声で、生徒たちが一斉に立ち上がる。そして、先生に向かって、深く、心のこもったお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

顔を上げた生徒たちの表情は、50分前とは比べ物にならないほど、深く、そして晴れやかだった。

授業終了を告げるチャイムが静かに響いた。

道徳ノート1 規則と思いやり

規則は何のためにあるのか？

- ・みんなが安心して過ごすため
- ・みんなを守るため
- ・秩序を生み、守るため

規則は絶対か？

- ・絶対。例外を認めてしまうと規則の意味がなくなってしまう。
- ・絶対ではない。場合による。
- ・破るには「覚悟」が必要。

罰は何のためにあるのか？

- ・言葉で終わらせず、社会の秩序を守るため
- ・自分の行動を反省するため
- ・規則を守っている人が不公平さを感じないように

- ・「責任」を形として引き受けるため
- ・許しへの準備。機会を与えるため

この時間のまとめ

- ・規則にはそれなりの理由がある。
- ・人の考えは変わりゆくものである。
- ・判断や行動には責任が伴う。
- ・たった一文、たった一文字変えるだけで、伝わる印象は大きく変わる。

内容項目

- (1) 自主、自律、自由と責任
- (10) 遵法精神、公德心
- (6) 思いやり、感謝
- (9) 相互理解、寛容
- (11) 公正、公平、社会正義

2時間目 読み物「ネット将棋」一日目

「勝負」の世界は、私たちの日常と密接に結びついている。スポーツやゲーム、あるいは試験やコンクール。私たちは常に、他者と競い合い、その中で成功と失敗を経験しながら生きている。

教育の場において、その指導はしばしば「勝つことの素晴らしさ」と「負けることの悔しさ」という二元論に終始しがちである。しかし、その単純化された構図は、時に本質を見失わせる危険を孕む。勝利のみを追い求めるあまり、他者への敬意を忘れ、自分自身の誇りさえも見失ってしまうことはないだろうか。

この時間は、その勝利至上主義の奥に潜む、人間の複雑な心理に光を当てる授業のシミュレーションである。題材は、1時間目に続き、文部科学省の教材『私たちの道徳』から物語「ネット将棋」を用いる。

単なる勝敗の結果ではなく、そのプロセスにおける自己の在り方を問う。そして、「他者にどう思われるか」という外部の評価軸から、「自分自身が、その行動を誇れるか」という内なる評価軸へと、生徒たちの意識を転換させることは可能か。その挑戦的な試みを、様々な個性と正義感がぶつかり合う教室の中で描いていく。

生徒会での活動のため初回の授業を欠席した海翔が、わくわくした様子で陽奈に尋ねる。

「前回の道徳、どんなことしたん？」

「『二通の手紙』っていうお話で、規則を守ることにについて考えたよ。いろんな意見が出たんだけど、先生はどの意見も大事にしてくれて、自分の意見が発表しやすかった！」

陽奈の言葉に美緒が静かに頷く。それを横で聞いていた竜二が鼻で笑う。

「どうせ、いつも一緒だろ。みんな綺麗事ばっか言いやがるんだ。道徳の授業なんて退屈だから、前も保健室でサボってやったんだよ」

「るい先生の授業、退屈じゃなかったけどな……」

大輝が呟くように漏らしたその言葉は、海翔の期待を膨らませた。

「おはよう！」

挨拶しながら先生が入ってくる。前回揃わなかった生徒たちが揃っているのを確認して、先生は嬉しそうに話す。

「今日はみんな揃ってるな。前よりも多くの意見が聞けそうや。そうそう、せっかく揃ったし、僕のクラスでの道徳のルール、もう一回話しとくわな」

先生は、道徳とは何か、そして土台となる二つの大前提が何か、生徒たちと確認した。

「そうや、咲さん。虹の端っこ探して学校サボってまで探検するのやめてな。この前、何の連絡もなかったの心配したで。お家の人は『あの子のことだから、どこか探検してるんじゃないかな』って言うてはったけど」

先生の呆れたような、でもどこか面白がっているような注意に、咲は「えへへ」と笑った。悪びれている様子はないが、教室の空気は和む。

ほのぼのとした空気の中、授業開始のチャイムが鳴る。

「ほなやっていこか。道徳の授業を始めていきます。お願いします」

先生の挨拶に生徒たちは立ち上がり、声を揃える。

「お願いします」

「ほんなら今日は、28ページ開いて。『ネット将棋』ってお話使って考えて行こ」

先生の言葉で、生徒たちは一斉に教科書を開く。ガサガサとページのめくれる音が教室に響いた。拓也や海翔は、すぐにページを開いて先生の方をまっすぐ見ている。陽奈の隣で、咲が「あ、ネット将棋だ。私、どうぶつタワーバトルならやったことあるよ」と小さくささやき、陽奈が「しーっ」と人差し指を口に当てた。竜二は、面倒くさそうに本を開くと、机に肘をついてつまらなそうな顔をしている。大輝と美緒は、静かに教科書のタイトルを見つめていた。

「はは、どうぶつタワーバトルか。あれおもしろいよね」

先生は咲のささやきに気付いて、小さく笑った。顔に優しい微笑みをたたえながら、チョークを手に取り授業を進める。

「よし、今日やっていくお話はちょっと登場人物多いから、名前の出てくる人たちは黒板に簡単にまとめとくね」

先生が物語を読み始めると、教室の空気は静かな集中に満たされた。主人公が敏和との対局で時間稼ぎをする場面では、竜二の口元に、少しだけ「分かってるぜ」

と言いたげな笑みが浮かぶ。主人公がネット将棋で一方的に通信を切断する場面では、彼は小さく頷いた。一方、明子のソフトボールの話になると、陽奈や美緒は「あーあ……」というように、少し悲しそうな顔で聞き入っている。敏和が『負けました』って言うことで、力が伸びていく」と語る場面では、海翔や拓也が深く頷き、大輝は何かを考えるように、じっと自分の指先を見つめていた。

範読が終わり、先生が問いかける。

「ほな、お話読んだ感想を聞いてみようか。思ったこと自由に言ってみてみて」
物語の余韻が残った、少し重い沈黙が流れる。最初に咲が手を挙げた。

「はい！ あの、わたし、どうぶつタワーバトルをネットでやったとき、相手が変な形のゾウを置いてきて絶対負けてしまうって思ったんですけど、そしたら急にラッコが一番上から降ってきて、奇跡的にバランスが取れて勝てたんです。それって将棋で言う『奇跡の一手』みたいな感じなのかなって思いました！」
すると、それを聞いて鼻で笑うように、竜二が口を挟んだ。

「てか、この話の主人公、別に普通じゃね？ 負けそうになったら時間稼ぎするとか、ネットでムカついたら通信切るとか、当たり前だろ。いちいち『負けました』とか言って頭下げるほうがダセェわ。そんなんで強くなるとか、ただの綺麗

事。ウケる」

竜二の言葉に、陽奈がカッとなって反論する。

「え、そんなことないよ！ 私は、ソフトボールの明子さんの話が、すごく可哀想だなんて思った……。最後のバッターになっちゃって、悔しくて挨拶もできなくなっちゃう気持ち、分かるもん……。それに、敏和くんは全然ダサくない！ すごく大人だなんて思った！」

空気が少しピリついたところで、海翔がなだめるように話し始めた。

「竜二の言うみたいには、主人公の気持ちも分からんでもないけどな。誰だって負けるのは恥ずかしいし、逃げたくなる。でも、敏和みたいに、その負けから何かを学ぼうとする姿勢も確かにある。その『逃げる弱さ』と『向き合う強さ』の両方が描かれているのが、この話のポイントなんじゃないかな」

拓也、美緒、大輝は、まだ発言せず、三者三様の意見を静かに聞いている。

先生は頷きながら、生徒たちの意見を受け止める。

「うんうん。勝ちたいって気持ちも分かるし、悔しくて挨拶できなくなるのも分かるわ。だって、誰も負けたくて対戦なんてせえへんもんな」

先生その言葉に、少しピリついてた教室の空気が、ふっと和らいだ。挑発的

だった竜二が、少し驚いたように先生の顔を見て、「だろ？」とでも言うように、強く一度頷く。自分の気持ちを分かってくれた、と感じたようだ。他の生徒たちも、静かに頷く。クラス全員の気持ちが「負けるのは悔しい。だから勝ちたい」という点で一つになった。

「さて、このお話は『勝負』を軸に展開してたな。まずは『勝負』についていろいろ考えてみよか。みんなは勝負するの好き？」

先生の問いかけに陽奈が元氣よく答える。

「はい！ 好きです！ 試合とか、勝ったらめっちゃ嬉しいし、みんなで『やったー！』ってなるのが楽しいから！」

竜二が続く。

「勝つのは好きだな。相手をボコボコにして、どっちが上か思い知らせるのは気分いい。負ける勝負は時間の無駄だからやんねーけど」

拓也は冷静に答えた。

「勝つために作戦を考えたり、練習したりするのは好きです。自分の力がどれくらいか試せるので。でも、ただ運だけで決まるような勝負はあまり好きじゃないです」

海翔が笑顔で言う。

「俺も好きやで。本気でやり合うからこそ、終わった後に相手と仲良くなれたりするしな。お互い、ちょっと成長できる気がするから」

美緒は少し申し訳なさそうに言った。

「私は……あんまり好きじゃないです……。どちらかが勝って、どちらかが負けるっていうのが、なんだか悲しい気持ちになるので……。みんなで何かを作るほうが好きです」

咲が楽しそうに話す。

「好きです！ どうぶつタワーバトルで、誰も思いつかないような変な動物の積み方ができてタワーがすごく芸術的になったときは、勝つと同じくらい良いなって思います！」

少し間を置いて、大輝が静かに言った。

「……あまり、考えたことないです。人と勝負するより、昨日できなかったことが、今日できるようになることのほうが、気になるので……」

先生はみんなの意見をまとめる。

「なるほどな。みんな考えは違ってるけど、『勝つ』とか『成長』っていうプラス面

が大きそうやな。ほなら、負けたらどういう気持ちになる？　これは意見いろいろ出てきそうやな」

新たな問いかけに、竜二が吐き捨てるように答えた。

「は？　ム力つくだけだろ。時間の無駄だったって思うし、相手がズルしたんじゃないねえかって勘繰るわ。気に食わねえから、もう二度とそいつとはやんねえ」

陽奈が悔しそうに言う。

「すっごく悔しいです！　『めっちゃ練習したのにー！』ってなるし、自分のせいで負けちゃったら、チームのみんなに申し訳なくて、泣きそうになります」

拓也と美緒もそれに続く。

「もちろん悔しいですけど、それよりも『なんで負けたんだろう』って原因を分析します。作戦が悪かったのか、練習が足りなかったのか……。そこが分からないと、次に勝てないので」

「やっぱり、悲しいです……。自分の力が足りなかったんだなって落ち込むし、相手にも、もっと良い勝負ができなくて申し訳ない気持ちになります……」

海翔は笑いながら話す。

「悔しいけど、半分は『やるな、相手』って感心するかな。完敗やったら、むしろ

スッキリするかも。『次は絶対勝ったる』って次の目標ができるから、それはそれで燃えるで」

大輝が静かに呟く。

「……腹は、立ちません。悔しい、というより……。できなかった自分に、がっかりします」

みんなの意見を聞いた後、咲はあっけらかんと言った。

「負けちゃっても、あんまり気にならないです！ それよりも、さっきまで作ってたヘンテコな動物タワーが、ガラガラって崩れちゃうほうが『あー！』ってなります。でも、また最初から作れるから、それはそれで楽しいです！」

先生は一度、生徒たちを見渡した。

「『ムカつく』とか『悔しい』、『悲しい』、『申し訳なくなる』っていうマイナス面と、『次へのエネルギー』っていうプラス面がありそうやな。咲さんみたいに『あんまり気にならない』って人もいていいかもね。いま『プラス面』『マイナス面』って言うんだけど『良い面』『悪い面』ってわけじゃないからな。決してその感情が悪いわけではない」

先生は生徒たちの感情を認めつつ、陽奈と美緒の方を見る。

「でも、陽奈さんとか美緒さんの言ってくれた『申し訳ない』って気持ちには、僕はもつ必要ないと思うよ。勝負なんて全力でやってたらそれでいいんじゃない。『手抜き』と『実力不足』は違うもんね」

陽奈と美緒は、ハッとした顔でお互いを見つめた。陽奈が戸惑いながらも口を開く。

「え……そうなんですか？ でも、自分のせいで負けたら、やつぱり『ごめん！』って思っちゃいます……。『手抜き』と『実力不足』は違う……。そっか……」

美緒は少し救われたように、ほっとした表情を浮かべた。

「『申し訳ない』って、思わなくていい……。そうか……。一生懸命やった結果なら、胸を張っていいってことなのかな……。なんだか、少しだけ気持ちが楽になりました」

その二人をフォローするように、海翔が力強く言う。

「先生の言う通りやで。お前らが全力でやって負けたなら、チームの誰も責めへんよ。むしろ『次がんばろうぜ』ってなるだけや。謝るより『悔しい！』って言うてくれるほうが、周りもスッキリすると思うで」

拓也も、論理的に同意する。

「僕もそう思います。『手抜き』はプロセスの問題で、『実力不足』は現時点での結果の問題です。負けたときに反省すべきなのはプロセスであって、全力を出した結果について謝罪する必要はない。合理的だと思っています」

竜二は、腕を組んだまま、ふんと鼻を鳴らした。

『実力不足』なら、ただ弱いつてただけだろ。謝る必要はねえ。次に勝てばいいだけだ。……まあ、俺は負けねえけど」

先生は話題を少し戻した。

「勝ち負けについて考えたけど、そもそもみんなが考える『勝負の楽しさ』って何やろう。これと思ったこと自由に言っていってみて。美緒さんとかは『勝負が好きじゃない』って言うってくれてたけど、もし何か『こういうところは楽しいかも』みたいなのが思いつけば言ってみてか」

陽奈が目を輝かせて答える。

「やっぱり、勝った瞬間です！ 特に、ギリギリの試合で最後に逆転したときとかは、もう最高！ みんなで抱き合って喜ぶのが、一番楽しいです！」

竜二が不敵な笑みを浮かべて言う。

「相手が『こいつ、強え……』って絶望した顔すんのをるのが面白い。自分の思

い通りに相手をコントロールして、完膚なきまでに叩きのめす。それが一番の快感だろ」

拓也は少し得意げに話す。

「自分の立てた作戦が、相手にピタツとはまった時が一番楽しいですね。『こう動けば、相手はこう来るはずだ』って読んで、その通りになった瞬間は、パズルが解けたみたいでスッキリします」

海翔は爽やかに語る。

「本気の相手とやっていると、『こいつ、やるな！』ってお互いに思える瞬間かな。

勝ち負けも大事やけど、その一瞬一瞬の駆け引きとか、終わった後に『良い勝負やったな』って言い合える関係がええなあって思うわ」

美緒が言葉を探しながら、ゆっくりと話す。

「えっと……。勝負そのものは、やっぱり苦手なんですけど……。でも、もしチームで試合に出るなら、試合までの間、みんなで励まし合ったり、一緒に練習したりするのは……楽しい、かも、しません」

咲は身振りを交えて楽しそうに言う。

「勝負の途中で、誰も予想してなかったようなハプニングが起きるのが楽しいで

す！ どうぶつタワーバトルで、絶対無理だと思って置いたキリンが、なぜかカメの甲羅に引っかかって、すごいタワーができたときとか！ 勝ち負けより、そういうのが面白いなって！」

最後まで静かに考えていた大輝が、ぽつりと口を開いた。

「……勝負している間、他のことを全部忘れて、それだけに集中できる時間は……好き、かもしれません」

先生は優しく頷いた。

「みんなそれぞれに『楽しい』と思えるポイントがありそうやね。美緒さんも、『勝負そのもの』ではなくて『それまでの仲間との時間やプロセス』に楽しさを見出してくれたんなやな」

先生が特に美緒に優しく語りかけると、美緒は少しはにかみながら、でも自分の気持ちに正確に理解してくれたことが嬉しいという表情で、こくんと頷いた。

「……はい」

陽奈や海翔も、先生の言葉に「うんうん」と頷いている。クラス全体が、多様な「楽しさ」の形があることを改めて共有したような、穏やかな空気が流れる。

先生は本題に戻った。

「ほんならここで『僕』の行動について考えていこうか。『僕』の『試合を引き延ばして引き分けに持ち込む』『急にログアウトして、勝敗をつけることから逃げる』っていう行動を受けた対戦相手がみんな自身やったら、この行動に対してどう思う？」

先生がそう問いかけると、生徒たちは、自分が対戦相手だったら……と想像し、次々と顔をしかめた。竜二が嘲笑う。

「はっ、ダッセエな。最後まで戦う根性もねえのかよって思うわ。まあ、相手がビビって逃げたってことだから、俺の勝ちでいいけどな。雑魚はそうやって逃げるしかねえんだよ」

陽奈が憤慨して言う。

「すごいムカつきます！ こっちは本気でやってるのに、すごい失礼じゃないですか？ 最後までちゃんと勝負してほしい！ 逃げるなんて、卑怯です！」

拓也も続く。

「腹が立つというより、がっかりします。勝負の記録も残らないし、対局後の感想戦もできない。何のために時間をかけて将棋を指したのか、分からなくなります。すごく無駄な時間だったと感じてしまいます」

海翔が少し同情するように言う。

「うーん……もちろん、ええ気はせえへんな。でも、それと同時に『ああ、この人、負けるのがめっちゃ怖いんやな』って、ちよつと可哀想になるかもしれない。」

勝負を楽しむ余裕が、今はないんやろなって」

美緒が不安そうに呟く。

「え……私何か悪いことしちゃったのかなって、不安になります……。相手が楽しくなかったのかな、とか……。勝負が終わらないのも、なんだか悲しいです……」

咲が不思議そうに首を傾げる。

「『あれ？』って思います。どうぶつタワーバトルだったら、途中でいなくなっちゃったら、作りかけのタワーだけが残って『どうなっちゃうんだろう？』って。勝負より、タワーのほうに心配になります！」

大輝が静かに、しかしはつきりと言った。

「……對話が、途中で終わってしまった感じがします。相手は何を考えていたのか、最後まで分からなくなる。……それが、一番気持ち悪いです」

先生は頷き、優しく話す。

「そうやんな、良い気はせんよな。みんながさっき考えてくれた『勝負の楽しさ』も途中で途絶えるもんな」

そう言うのと、先生は竜二くんに視線を移す。

「そういえば竜二くん、最初『負ける勝負は時間の無駄、負けそうになったら切る』って言うてくれてたやん？ 相手の気持ちを踏まえてどう思う？ 『だっせえ』とか思われてるかも」

教室の視線が一斉に竜二に集まる。彼は一瞬、意表を突かれたような顔をしたが、すぐにいつもの不遜な表情に戻った。

「……別に。相手がどう思おうが、俺には関係ねえ。だっせえって思いたきや、勝手に思っとけばいい。そんなメンタル弱い奴は、どっちみち俺の相手じゃねえかな。そもそも、顔も見えねえネットの相手の気持ちとか、考えてやるだけ無駄だろ」

竜二はそう言って、挑むように先生を見返した。彼の言葉に、陽奈や美緒は少しショックを受けたように目を見開き、拓也は「それは違うだろ」と言いたげに眉をひそめている。海翔は、腕を組んで、何かを考えるように静かに竜二を見つめている。教室に、再び緊張が走った。

先生がクラス全体に問いかける。

『ダサイ』 っと思うのはメンタル弱いんやろうか」

その問いに、はっきりとした意思が感じられる空気が生まれた。最初に口を開いたのは海翔だった。

「いや、逆やないかな。ちゃんと『それはダサイ』 っと思えるっていうのは、自分の中にフェアプレーみたいなの、しっかりした『ものさし』があるからやと思う。むしろ、そのものさしを無視して、ルールを破ってでも自分だけ勝ちたいって思うほうが、精神的には弱いんじゃないかな。負けを認められない弱さ、というか」
続いて、拓也も同意する。

「弱いとは思いません。勝負は、決められたルールの上で成り立つものです。その前提が破られたことに対して、おかしいと感じるのは、正常な感覚です。その感情がなくなったら、そもそも社会が成り立たないと思います」

陽奈も強く頷く。

「弱くないです！ 全然弱くない！ 相手が卑怯なことしたら、『なにそれ！』 っと思うのが普通じゃないですか？ そう思わないほうがおかしいです！」

三人の意見を聞いて、竜二が舌打ちしながら反論する。

「……いちいち相手の行動に本気でムカついて、感情的になるのが弱いって言ってるんだよ。本当に強い奴は、相手が逃げようが何しようが、『ふーん』で終わりだろ。気にしてる時点で、そいつと同じレベルってことだ」

美緒、大輝、咲は、発言はしないが、海翔や拓也の意見に頷いたり、竜二の反論に考え込んだりしながら、真剣な表情で議論の行方を見守っている。

先生は静かに竜二を見つめた。

「そやな。僕も、ダサいって思うことや感情的になることが悪いとは思わへん。

だって竜二くん自身もされたら『ダサい』って思うやろ？ いま竜二くんは相手の感情を考えると自分に自身を重ね合わせてくれたと思うねん。これって『見えない相手』じゃなく『竜二くん自身』がそれを『ダサい』って思ってるってことなんや」

先生の、静かで、しかし真っ直ぐな言葉が教室に響く。クラスの全員が、固唾をのんで竜二を見ていた。彼は、先生の言葉を聞くと、一瞬「は？」と何か言い返そうとして口を開きかけたが、何も出てこない。

「……っ」

反論の言葉が見つからない。先生に「お前自身が『ダサい』と思っているのだ」

と、自分の心の内側を、鏡で見せられたように感じたのだろう。竜二は、初めて悔しそうに、そして少しバツが悪そうに、先生からふいと目をそらして、黙り込んでしまった。その様子を、海翔と拓也は「なるほどな……」というように深く頷きながら見つめ、陽奈と美緒は、驚いたように目を見開いている。大輝は、黙り込んだ竜二の横顔を、じっと静かに見ていた。

先生はクラス全体に語りかける。

「もちろん、『他の人がどう思おうか関係ない』ってのは生きていく上でめちゃくちゃ大事なんですよ。だって、『誰かに嫌われるかもしれない』とか『どう思われちゃうんやろう』とか思いながら生きるのって、めっちゃしんどいやん？」

生徒たちは他人の目を気にする生きづらさを想像して、静かに頷く。

「でも『自分自身はどう思うか』ってのは別や。『他の人がどう思おうか関係ない、でも自分はこの行動をダサイと思う。ダサイ行動はしたくないなあ』って行動を変えていくんや」

先生の言葉は、説教ではなく、静かな独り言のようにも、クラス全体への問いかけのようにも聞こえた。教室は、深い沈黙に包まれている。さっきまで頑なに外を向いていた竜二の視線が、自分の机の上に落ちた。彼は、握りしめた自分の拳を、

ただじっと見つめている。先生の言葉が、彼の鎧の内側にある、彼自身の「ものさし」に届いたのかもしれない。

海翔と大輝は、深く頷きながら、強い尊敬の眼差しで先生を見ている。先生が言語化したかった核心を、二人は完全に理解したようだ。拓也も、それが最も合理的で、強い生き方であるとも言うように、納得の表情で聞いている。陽奈や美緒も、ただ「人にどう思われるか」を気にするのは違う、「自分が自分をどう思うか」という新しい考え方に、真剣な表情で向き合っていた。

先生は、改めて陽奈と美緒に視線を向けて語りかける。

「竜二くんを取り上げたけど、この考え方は陽奈さんとか美緒さんにもめっちゃ刺さってくれるんじゃないかなって信じてる。この考えを聞いた今だったら『負けても申し訳ないとは思わなくていい』ってのがより一層分かんと思うねん。どうやるか？」

二人は、自分たちの心に直接語りかけられているその言葉を、真剣に受け止めていた。先に、陽奈が、大きく一度頷いて、顔を上げた。

「……はい！　なんだか、分かった気がします。負けて『申し訳ない』って思うのは、『チームのみんなにどう思われるかな』って、他の人の目を気にしてたから

だったのかも……。でも、自分が『ダサイプレーはしてない、全力でやった』って胸を張って言えるなら、謝る必要はないんですね。『悔しい！』っていう、自分の気持ちだけでいいんだ……！」

続いて、美緒も、吹っ切れたような、穏やかな表情で言った。

「はい、すごくよく分かります。さっき、少し気持ちが楽になった理由が、はっきりしました。『他の人がどう思うか』じゃなくて、『自分は、自分のこの行動をダサイと思うか』……。そう考えたら、一生懸命やった結果、負けてしまった自分を、自分で『ダサくないよ』って認めてあげられる気がします。だから、もう『申し訳ない』って思わなくてもいいんですね」

二人の言葉に、海翔は「そうそう」とでも言うように、優しく微笑んでいる。竜二は、顔を伏せたままだが、肩の力は少し抜けているように見える。彼もまた、自分以外の生徒にかけられた先生の言葉を、自分のこととして聞いているのかもしれない。

先生は優しく頷き、続ける。

「そういうことや。ほなら最後、ちょっとだけ脱線するわな。『自分がされて嫌なこととはするな』ってよく聞くん？ あれ『俺は別に嫌だとは思わないから』って

いう反論めっちゃ聞くんよ。さっき言うた話やと反論が正しそやん？」

生徒たちは、なんとなく受け入れてきたその言葉の意味を真剣に考え始めた。

「でも違うよね。これはいつも僕が言うてる『みんなで気持ちよく過ごせるのが良いね』ってのを思い出してほしい。『じゃあ……、どゆこと？』ってなるやんな。僕はそのよく聞くやつを変えたこれを掲げるわ」

「……『相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな』」

先生が、ゆっくりと、しかし力強くその言葉を紡ぐと、教室は水を打ったように静かになった。生徒たちは、これまで議論してきたこと全てが、その新しい言葉の中に集約されていくのを感じていた。しばらくの沈黙の後、海翔が、深く息を吸い込んで、感嘆の声を漏らした。

「……先生、それ、凄いですね……。『自分がされて嫌なこと』じゃなくて、『相手が嫌がること』ってのが、全然違う。自分の基準じゃなくて、相手の気持ちを想像することが大事なんです。そして最後の『自分を犠牲にはするな』って言葉があるから、ただの良い人にいるんじゃないくて、お互いが本当に気持ちよくいられる、本当の意味での『思いやり』になるんじゃない……。めっちゃくちゃしっくりき

ました」

拓也も、そのルールの完成度に頷いている。

「すごく、分かりやすいです。最初のルールだと『俺は平気だから』っていう反論ができてしまうけど、先生のルールにはそれがない。それに、『自分を犠牲にするな』という条件が付いていることで、無理をしなくてすむ。すごく合理的で、現実的なルールだと思います」

美緒は、特に「自分を犠牲にはするな」という言葉に、何かを気付かされたような表情で、静かに先生の言葉を噛み締めている。竜二は、腕を組んだまま、静かに目を閉じていた。

先生は一度区切りを入れた。

「おっしや、今日の授業の内容はこの辺にしとくか。みんなそれぞれに考え方の変化とか気付きたかがあったと思う。この読み物は次の授業でも使うから、次回も楽しみにしてて。」

先生が授業の終わりを告げると、生徒たちは「え、もう終わり？」というような、少し名残惜しそうな顔をした。

「じゃあ最後、ワークシート配るから、感想とか考えたことまとめておいて。自分

の中で成長した部分があれば、自信もって僕に自慢してな。ほな書いてもらって、書けたら後ろから前に回していつてか。焦らんでいいよ。ゆっくり授業を振り返ってな」

先生の最後の言葉を聞くと、それぞれが静かに頷き、ワークシートと鉛筆を手にする。教室には、自分の心の中を覗き込むような、穏やかで真剣な時間が流れ始めた。

一人、また一人と顔を上げ、書いた紙を後ろから前へと静かに回し始める。

「全員分集まったかな。ありがとう。ほんならこの感想は後でゆっくり読ませてもらうわ。ちょうど時間やな。道徳の授業終わります。ありがとうございました」先生の言葉で、張り詰めていたような、それでいて充実感のある空気がふっと和らぐ。

陽奈が、前回と同じように、でも少しだけ落ち着いた声で、号令をかけた。

「起立！」

七人の生徒が、静かに、そして一斉に立ち上がる。それぞれが、この一時間で考え抜いたことの重みを感じながら、先生に深くお辞儀をした。

「ありがとうございました！」

顔を上げた生徒たちの表情は、少し疲れているようにも見えたが、その目には、難しい問題から逃げずに考え抜いた者だけが持つ、静かで強い光が宿っていた。

道徳ノート2 勝負と誇り

勝負の楽しさとは何か？

- ・試合に勝つこと
- ・立てた作戦が上手くいくこと
- ・相手との駆け引きや、試合後の健闘をたたえ合う関係
- ・仲間と一緒に練習したり励まし合ったりする過程

勝負に負けたとき、どう思うか？

- ・腹が立つ。時間の無駄だったと感じる。
 - ・悔しい。悲しい。
 - ・チームや相手に申し訳なく思う。
 - ・次に繋げるエネルギーになる。完敗はむしろスッキリする。
- 相手を尊重しない行動（時間稼ぎ、通信切断）をどう思うか？
- ・失礼。卑怯な行為だと感じる。ダサい。

- ・ 時間が無駄になり、対局から学べなくなる。
- ・ 余裕のなさを、少し可哀想に思う。
- ・ 自分が何か悪いことをしたのではないかと不安になる。
- ・ 相手との対話が途中で終わってしまったように、気持ち悪い。

この時間のまとめ

- ・ 本気で戦うからこそ、勝負は楽しい。
- ・ 他の人がどう思おうが関係ない。
- ・ 自分がどう思うかが大切である。(自分自身が誇れる生き方)
- ・ 「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」(相手のことを想像する。思いやりの気持ち)

内容項目

- (1) 自主、自律、自由と責任
- (9) 相互理解、寛容
- (22) よりよく生きる喜び

ワークシート1

先生は、集まった感想に目を通し、一人ひとりの心に届けるように、青ペンでコメントを書き込んでいく。

陽奈のワークシート

今日の授業で一番心に残ったのは、先生が言ってくれた「手抜きと實力不足は違う」という言葉です。負けたときに「申し訳ない」って思うのは、チームのみんなにどう思われるかを気にしていたからだって気付きました。

「私の成長（自慢！）」これからは、もし負けても、自分が全力を出し切ったって言えるなら、「ごめん」じゃなくて「悔しい！」って胸を張って言おうと思います。

先生より

ええやん！ 全力出したら胸張って「悔しい！」って言いな。そっちのほうが周りは気持ちいいと思うし、何よりも陽奈さん自身が楽しめると思うよ！

美緒のワークシート

最後の先生の言葉が、お守りみたいに聞こえました。「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」私は今まで、自分を犠牲にすることが優しさだと思っていたかもしれない。

「私の成長」これからは、相手も自分も気持ちよくいられる優しさを考えたいです。自分を大切にすることも、優しさの一つなんだって思えました。

先生より

そうやな。「気を遣う」のと「優しさ」は別やねん。(またどこかの授業で扱う予定。ネタバレごめんね。) 気遣いは気を遣うほうも遣われるほうも疲れるの。自分を大事に優しくいこう！

拓也のワークシート

主人公の行動は、当初から非合理的だと思っていました。しかし、なぜそれがダメなのかを「相手の気持ち」や「自分の基準」といった言葉で深く考えたことはありませんでした。

「僕の成長」「自分がされて嫌なことはするな」というルールが不完全であるこ

と、そして先生がくれた新しいルール（相手が嫌がることは）が、より論理的で現実的であることに気付きました。物事をより深く、多角的に見る力が少しずついたと思います。

先生より

論理的な拓也くんにも刺さったみたいで嬉しい！ 道德って模範解答のない状態で最適解を見つけるようなもの。いろんな視点から見れると判断がしやすくなるね。

海翔のワークシート

今日の授業で一番勉強になったのは、先生が竜二に話したことです。俺やったらたぶん「お前の考えは間違ってる」って真正面から否定してぶつかってたと思う。でも先生は、竜二自身の言葉を使って、本人に考えさせた。だからこそ竜二も、自分自身を見つめ直せたんやと思う。

「俺の成長（自慢）」相手を否定するんやなくて、相手の中にすでにある「ものさし」に気付かせてあげることが、本当の意味で人を変える力になるんやなくて学びました。

先生より

読み物じゃなくて授業から学んでくれたんやな！ 僕が怒るとかぶつかってのが苦手な性格なだけかもしれへんけどね。授業も人との関わりやから、気持ちよく楽しくいきたいね。

咲のワークシート

ネットの将棋の話だったけど、私はどうぶつタワーバトルのことをずっと考えていました。途中で相手がいなくなったら、作りかけのタワーが残って可哀想だなって思いました。

『私の成長』 ネットの向こうにも、私と同じようにタワーを作ってる人がいるんだって、当たり前のことだけど、初めてちゃんと想像できた気がします。これからは、相手がいることを忘れないようにしたいです。

先生より

画面の向こうにいる相手の存在、大事やね。タワーだけじゃなく、タワーの向こう側にいる人のことも想像しながらタワーをつくると、より楽しくなるかもしれないね！

竜二のワークシート

「成長した部分？」 知らねえ。けど、先生が言ってた「他の奴がどう思うかは関係ない。でも、自分自身が自分の行動をダサイと思うかは別の話」ってやつ。あれは、まあムカつくけど、違うとは言えねえなと思った。これからは、人にどう見られるかじゃなくて、俺が俺のやったことを「ダサイ」って思わねえかどうか、考えてやる。……それだけだ。

先生より

ええやん。かつこええ。めちゃくちや成長しとるよ。「相手にどう思われるか」じゃなくて「自分がどう思うか」。次回以降の授業でも竜二くんの「カッコいいとこ」見してな！

大輝のワークシート

僕が今まで、なんとなく心の中で感じていたことが、先生の言葉ではっきりと形になりました。「人と勝負するより、できなかったことができるようになることが気になる」という僕の気持ちは、「自分のものさし」を大事にしていたからだと分かりました。

「僕の成長」 先生が最後にくれた「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな」という三つのルールは、僕がこれから生きていく上での、完璧な道しるべになると思います。ありがとうございます。

先生より

大輝くんはすでにちゃんと自分の気持ちを大切にしてたんやな。心をうまく言語化できるか分からへんけど、これからもなるべく分かりやすい言葉にしていこうと思うわ。ありがとう！

3 時間目 読み物 「ネット将棋」 二日目

2 時間目では、「勝負」における評価軸を単なる勝敗という結果から「自分自身の誇り」という内なる基準へと転換する試みを描いた。

では、その「誇り」とは、具体的にどのような態度や言葉、そして精神的な「強さ」に現れるのだろうか。一般的に「強さ」とは、他者を圧倒する力や、決して負けない能力として語られがちである。しかし、その定義は、敗北や困難に直面した際の、人間の精神的な尊厳を捉えきれているだろうか。

この時間は、その画一的な「強さ」のイメージを解体し、再構築することに挑む、二日目の授業のシミュレーションである。題材として、引き続き物語「ネット将棋」を深く掘り下げていく。

挨拶という日常的なコミュニケーションから、人間の「強さ」の本質へと迫る。

そして、「力を持っていること」と、真に「強いこと」とは、似て非なるものであるという結論へと、生徒たちを導いていく。人の心を動かし、自らを成長させる本当の強さとは何か。その答えを探す対話が、再び始まる。

生徒たちは前回の先生の言葉を思い返し、「今日は一体どんなことをするのだろうか」と期待を膨らませていた。

「おはよう。今日もやっていこか。まずは前回のワークシート返していくわな。一緒に今日のワークシートも配るわ。自分の分とったら後ろに回して行って」

生徒たちの手元に、二枚のプリントが配られていく。

生徒たちは、自分のシートを受け取ると、少し緊張した面持ちで青文字のコメントを読み始めた。

陽奈は、先生のコメントを読むと、「はいー」と声に出して頷き、満面の笑みで背筋を伸ばした。美緒は、『「気を遣う」のと『優しさ』は別……』と書かれた部分を指でそっとなぞり、何か大切な言葉を受け取ったかのように、ふわりと微笑んだ。

海翔と拓也は、先生からの的確なフィードバックに、尊敬の念を込めて「なるほど」というように深く頷いている。咲は、「タワーの向こう側！」と小さくつぶやき、何やら新しい面白い遊びを思いついたかのように目を輝かせた。

そして、竜二。彼は、自分のワークシートに書かれた「かつこええ。めちゃくちゃ成長しとるよ」という文字を、誰にも見られないように、でも何度も読み返している。そして、ふいと顔を上げた時、その口元には、ほんの少しだけ照れくさそうな笑みが浮かんでいた。彼は、少しだけ行儀よく座り直した。

大輝は、先生からの感謝の言葉に、静かに、そして深くお辞儀をした。

クラス全体が、先生からの温かいフィードバックによって、ポジティブで集中した空気に包まれている。

「……全員行き渡ったかな」

先生は教室全体を見渡し、頷いた。

「じゃあ道德の授業始めていきます。お願いします」

「お願いします」

生徒たちの声が、昨日よりも少しだけ、はつきりと揃ったように響いた。

「よし、じゃあ前回のお話……」

先生はそう切り出すと、小声で「なんか海外ドラマみたいな言い方になってた……」と呟いた。その少しおどけたような言い方に、教室の空気が和らぐ。

『ネット将棋』を通してどんなこと考えたか覚えてる？」

生徒たちは、昨日の濃密な授業を思い出しながら、記憶をたどっていた。最初に、整理するように話し始めたのは拓也だった。

「はい。最初は『勝負は好きか』という話から始まって、負けたときの気持ちについて話し合いました。そこから、主人公の行動が相手にどう思われるか、という話になって……。最後に、先生が『自分がされて嫌なことはするな』というルールの、新しい考え方を教えてくれました」

拓也の言葉に、陽奈が付け加える。

「あと！ 先生が、『負けても申し訳ないって思わなくていい』って言ってくれたことです！ 『手抜き』と『実力不足』は違うんだって」

さらに、海翔が、昨日の議論の核心に触れた。

「竜二が『相手の気持ちは関係ない』って言ったときに、先生が『他の人がどう思うかじゃなくて、自分自身が自分の行動をどう思うかが大事だ』って話をしてくれたのが、一番印象に残ってるわ。」

その言葉に、竜二は少しだけ視線を下に向けたが、何も言わずにまた先生の方を見た。美緒もさらに付け加える。

「はい。他の人の目を気にしないでいいっていうのを聞いて、少し気持ちが楽になったのを覚えています」

「そうやったな。勝負の話から、気の持ち方、行動を起こす判断基準について考えた。なかなかハードな、重めの授業になってたな。今日は『言葉と気持ち』について考えていこうと思うで。まずは3分あげるから、お話の内容ザーッと読み返してみてか。んーと、28ページな」

先生の言葉を受けて、生徒たちは一斉に教科書に視線を落とし、パラパラとページをめくる音だけが静かに響き渡る。

陽奈と美緒は、特に明子のソフトボールの場면을、感情を確かめるようにもう一度じっくりと読んでいる。拓也は、全体を素早く見返し、話の要点を再確認しているようだ。

竜二は、机に肘をつき、指で文字を追いながら、特に主人公が負けそうになって卑怯な手段をとる場面や、敏和が負けについて語る場면을、眉間にしわを寄せて読んでいた。

「読み返して、このお話の印象どうやろうか。前とは違った感想になってるかもしれへんな。ちょっと聞かせてか」

3分が経ち、先生がそう問いかけると、生徒たちは手元の教科書に再び目を落とした。最初に手を挙げたのは、拓也だった。

「はい。前は主人公の行動の『なぜ』ばかりを考えていましたが、今回は登場人物の『言葉』に注目して読みました。特に、ソフトボール部の監督が言った『心を忘れた挨拶しかできなかった自分というものを知ったことだ』という部分です。これは、ただ声を出せばいいわけじゃなく、言葉にどういう気持ちを込めるかが大事だ、という意味なんだと改めて思いました」

海翔は、少し違う視点から言った。

「俺は今回、言葉そのものよりも、『言えない』っていう気持ちの方に目がいったわ。主人公は『投了します』って言えへんし、明子さんは『私のせいで負けました』って言えへん。本当に言いたい大事な言葉ほど、悔しさとかプライドが邪魔して言えなくなる。その『言葉にできない気持ち』の苦しさが、この話のテーマなんかもしれへんな」

最後に、今までで一番低い、落ち着いた声で、竜二が口を開いた。

「……主人公が、通信切った後に『みんなこんなものだろ。真面目にやっていられるか』って、心の中で言い訳してるところ。……昨日の話を聞いた後だと、ここが一番ダセエと思った。結局、自分に嘘ついてるだけじゃねえか」

竜二の言葉に、教室の空気が少し変わった。陽奈や大輝、咲も、それぞれの意見に深く頷きながら、議論が昨日よりもさらに深まっているのを感じているようだ。

「みんな、僕が今日の授業のテーマとして言った『言葉と気持ち』に注目してくれたみたいやな。特に、なんか竜二くんの意見がいつにも増してカッコよく聞こえる。前回の授業での成長を感じて泣きそうになったわ」

先生が、少し照れたように、でも本当に嬉しそうにそう言うのと、教室に温かい空気が流れた。名指しで「カッコいい」と言われた竜二は、顔を真っ赤にして、バツが悪そうにそっぽを向いた。

「……別に。思ったこと言っただけだ」

ぼそりと、誰に言うでもなくつぶやく。その様子を見て、海翔と陽奈は、少し意地悪そうに、でも嬉しそうにニヤニヤしている。美緒は、先生の「泣きそうになった」という言葉に、もらい泣きしそうな優しい顔で微笑んでいた。

クラス全体が、一人の仲間の確かな成長と、それを見守る先生の温かい気持ちに

包まれている。

「じゃあ、今日の本題に入っていこか。まずは『お願いします』『負けました』『ありがとうございました』に込める気持ち。みんなやと、どんな気持ちでこの言葉を言う？」

最初に口を開いたのは、物事を整理するのが得意な拓也だった。

「僕は、全部『勝負のルールの一部』だと捉えています。『お願いします』は試合開始の合図で、『負けました』は終了の合図。『ありがとうございました』は、相手と試合全体への礼儀、みたいな。気持ちというより、それぞれの手順に必要な『合言葉』という感じですよ」

その意見に、陽奈が自分の気持ちを重ねる。

「私は、もっと気持ちがいもってるかな！『お願いします』は、『正々堂々、がんばろうね！』っていう気持ちで、『ありがとうございました』は、『本気で戦ってくれてありがとう！』っていう感謝ですよ！……『負けました』は……やっぱり、一番悔しい言葉ですけど……」

海翔は、さらにその奥にある意味を語る。

71 「全部、相手への敬意の表れかなって思うわ。『お願いします』は『あなたの時間を

借りて、真剣勝負を挑みます』っていう敬意。『負けました』は『あなたの勝ちです』っていう、相手の実力への敬意。で、『ありがとうございます』は『あなたと勝負できて良かった、成長できた』っていう、相手の存在そのものへの感謝やな」

三人の意見を聞いていた竜二が、それら全てを嘲笑うかのように言った。

「はっ。ただの挨拶だろ。気持ちなんかねえよ。『お願いします』って言いながら、どうやって相手を叩き潰すか考えてるし、『ありがとうございます』なんて、勝った方は気分いいから言えるけど、負けた方が言うのはただの負け犬のセリフだろ。俺は言わねえ。『負けました』もな」

美緒、大輝、咲は、発言はしないが、特に海翔と竜二の正反対の意見に、驚いたり、考え込んだりしている。

「なるほどな。どれもよく分かるわ。形式として言ってるかもしれないし、相手に対しての気持ちがあるかもしれない。そうやなあ……咲さんとかどう思う？ 挨拶に何か気持ち込めてたりする？」

先生が咲に優しく問いかけると、咲は少し考えてから、ぱっと顔を輝かせた。

「はいーえっと、どうぶつタワーバトルだと、『お願いします』って文字のスタンプ

もあるんですけど、私はいつも一番かわいいカピバラがお辞儀してるスタンプを送ります！ それを見ると、なんか和むからです。だから、気持ちは……『これから、一緒に面白いタワーを作って、楽しく遊びましょうね！』っていう感じですよ！ 相手と戦うっていうより、一緒に遊ぶ仲間っていう気持ちのほうが強いです！」

咲の答えに、教室の空気がまた少し変わった。美緒と陽奈は、「かわいい……」とでも言うように、ふふっと微笑んでいる。海翔も、その考え方は面白いな、というように感心した顔だ。

一方、竜二は、咲の「一緒に遊ぶ仲間」という言葉を聞いて、「はあ？」と、心底呆れたように小さく息を漏らした。

「気持ちが和むのか！ ええやん。『対戦相手は仲間』って考え方な。じゃあ逆に、みんなは『お願いします』『負けました』『ありがとうございました』を言われたらどう感じる？」

先生が問いの視点をひっくり返すと、生徒たちは「言われる側」の気持ちを想像し始めた。

『『お願いします』って言われたら、『よし、やるぞ！』って気合が入ります！』

『ありがとうございました』って言われると、『こちらこそ！　良い試合だったね！』って嬉しくなります！」

陽奈が言う。美緒は、

「ちゃんと挨拶してもらえると、すごくホッとします……。『ああ、この人は怖い人じゃないんだな、一緒に楽しく勝負できるんだな』って安心できるので……。『ありがとうございました』って言われると、こっちも『ありがとう』って、温かい気持ちになります。」

と話す。海翔が続けた。

「相手からちゃんと言われたら、一人の人間として、対戦相手として、尊重されるんやなって感じるな。『負けました』って言われたときは、相手がこっちの力を認めてくれた証拠やから、こっちも『いや、いい勝負やったで』って相手の健闘を讀みたい気持ちになる」

「勝負がルール通りに正しく開始されて、正しく終了したんだな、と確認できてスッキリします。特に、負けた相手がちゃんと『負けました』と言ってくれると、後腐れなく次の対戦に移れるので、合理的だと思います」

と拓也は分析する。竜二は吐き捨てるように言った。

「何も感じねえよ。言うのが当たり前だから。『お願いします』？ どうせ勝つのは俺だし。『負けました』？ そりゃそうだろう、お前は弱いんだから。ただの事実確認だ」

咲は楽しそうに話す。

「カピバラのスタンプが返ってきたら、『あ、この人もかわいいのが好きなんだな！』って嬉しくなります！ 『仲間が見つかった！』って感じですよ！ 『ありがとうございました』って言われたら、『また遊ぼうね！』って思います！」

最後に、大輝が静かに言った。

「……その言葉で、相手と繋がってる感じがします。同じ時間を、同じ気持ちで過ごしてるんだなって……。『負けました』って言われるのは、対話の終わりを、相手がちゃんと告げてくれたっていう感じがして、大事なことだと思います」

「みんないろんな考えが出たけど、全部ええ意見ばっかやな。バラバラに見える意見やけど、凝縮すると……」

「『挨拶もコミュニケーション』」

「ってことや。言われた側に感じるものがある。『何も感じひん』って言うてくれた竜二くんも『どうせ俺が勝つねん』とか『そりゃそうや』とか感じてるやろ？」

こういうふうには、相手の心に動きをもたらすのが挨拶なんや」

先生が、バラバラに見えた生徒たちの意見を「コミュニケーション」という一つの言葉でまとめると、教室に「ああ、なるほど」という納得の空気が満ちた。

特に、自分を例に出された竜二は、ぐっと言葉に詰まった。先生が、自分の「何も感じない」という強がりの中から、「どうせ俺が勝つ」という心の動きを的確に見抜いたことに、驚きと、ほんの少しの感心が入り混じったような、複雑な表情をしている。

海翔が、膝を打って言った。

「なるほどな……『コミュニケーション』か。確かに、俺らが言ってた『敬意』も、陽奈の『気合』も、さきの『遊びたい』も、全部相手に何かを伝えようとしているもん。竜二の『相手は格下』っていう確認ですら、コミュニケーションの一種なんやな。すごい、全部繋がったわ」

その言葉に、拓也や大輝も深く頷いている。陽奈や美緒も、ただの挨拶だと思っていた言葉の、その奥にある意味に気付き、目を輝かせている。

「これ聞いたうえで、先生の毎回の授業を思い出してほしいんやけどどう？ 何か気付く？」

先生のその問いに、生徒たちは一瞬きよんとした後、はっと何かに気付いたように、次々と顔を見合わせた。最初に、その気付きを言葉にしたのは海翔だった。『…あーなるほど……。先生が、毎回答授業の最初に『お願いします』って言って、最後に『ありがとうございました』って言うてくれる……。あれも、ただの号令やなくて、俺らに対するコミュニケーションやったんやな。『今から君たちの本気の意見を聞く準備ができてますよ』っていう始まりの合図と、『君たちが頭を使って考えてくれたことに感謝します』っていう、ちゃんとした終わりの合図。だから俺ら、安心して本音で話せてたんや』

海翔の言葉に、美緒が強く頷く。

「はい……。先生が最初に『お願いします』って言うのと、私も『よし、ちゃんと考えよう』っていう気持ちになります。で、最後に『ありがとうございました』って言われると、一生懸命考えてよかったなって、すごく温かい気持ちになります。先生が言葉で、授業の空気を作ってくれてたんだなって、今、思いました」

竜二は、何も言わない。言わないが、これまでで一番、何かを深く考え込んでいるような顔で、先生と、クラスの仲間たちを交互に見ている。自分が「意味がない」と切り捨てた「挨拶」を、この先生が、そしてこのクラスが、どれだけ大切に

しているかを、今、肌で感じているのかもしれない。

『うんうん。僕の授業は毎回『お願いします』から始まって『ありがとうございます』で終わってるはずなんや。ここには実は気持ちを込めていて、『一緒に授業創り上げていこうね。いろんな意見を聴かせてね。これから50分間お願いします』って気持ちと、『お疲れさま。いろんな意見が聞けて嬉しかったよ。良い授業と一緒に作ってくれてありがとうございました』って気持ち。別にみんな挨拶に気持ちを込めろ、とは言わない。でも、これを言われたら気持ちが切り替わるとかみんなの心の中で何かしら変化すると思うねんな』

先生が、普段の挨拶に込めている、本当の気持ちを打ち明けてくれる。生徒たちは、ただ黙って、その言葉を一言一句聞き漏らさないように、じっと先生を見つめている。

海翔が、クラスを代表するように、深く頷いた。

『……だから、先生の授業は、始まる時に『よし、やるぞ』って思えるし、終わった後に『ああ、頭使ったな』って充実感があるんですね。言葉だけやなくて、先生の気持ちも、ちゃんと俺らに届いてました』

美緒は、少し目を潤ませながら、とても嬉しそうに微笑んでいる。竜二は、顔を

上げて先生のを見ていたが、再びゆっくりと視線を落とし、何かを考え続けている。教室全体が、これまで以上に温かく、そして強い信頼感で結ばれたような空気に満たされた。

「じゃあ、30ページの真ん中らへん。明子さんが監督に言われたセリフ。『目の前の相手にお礼を言うことすらできないようでは、決して強くはなれないぞ』これってどういうことやと思う？ 納得できる？」

最初に、陽奈が、少し悩みながらも手を挙げた。

「最初は、明子さんが可哀想だっと思っていました。負けてめちゃくちゃ悔しいのに、『ありがとうなんて言えるわけじゃないじゃん！』って……。でも、前回の話を聞いてからだと、悔しい気持ちに自分の心に乗っ取られないで、ちゃんと相手への敬意を伝えられるのが『心の強さ』なのかなって……。だから、今は納得できません。でも、すごく難しいことだと思います！」

すると、待ってましたとばかりに竜二が反論する。

「はっ、意味わかんねえ。負けた奴が『ありがとうございました』なんて言ったら、ただの負け犬の遠吠えだろ。強さってのは、勝つことだろうが。負けた相手にヘコヘコ頭下げて、それで強くなれるなら誰も苦労しねえよ。納得できるわけ

ねえ」

その竜二の意見に、今度は海翔が静かに返す。

「俺はめっちゃ納得できるわ。勝負の結果だけに心を囚われて、相手への敬意とか、試合ができたことへの感謝を忘れてしまうのは、心がまだ未熟やからやと思う。

自分の負けをちゃんと受け入れて、相手を讃えられる。その心の余裕こそが、次の勝ちに繋がる本当の『強さ』なんやないかな」

最後に、拓也が論理的にまとめた。

「僕も納得できます。感情的に『悔しい』で終わらずに、『ありがとうございました』と口に出して言うことで、強制的に試合を終わらせて、次のステップに進むための区切りになるんだと思います。そこで気持ちを切り替えられないと、反省も分析も始まらない。結果的に、強くはなれない。合理的な考え方です」

他の生徒たちも、真剣な表情で議論を聞いている。「心の強さ」と捉える生徒たちと、「負け犬のセリフ」と切り捨ててる竜二。監督の言葉一つを巡って、クラスの意見は真つ二つに割れた。

「なるほどな。『気持ちを切り替えるスイッチ』みたいなもんか。『心の強さ』ね。

でも、負けた相手に頭下げても勝てやんもん……。じゃあ、『強さ』ってなん

やろうか。みんなはどう思う？ 勝負に限らんでいいよ」

先生が、勝負から離れて「強さとは何か」という、より本質的な問いを投げかけると、教室は深い思索の空気に包まれた。最初に、自信に満ちた声で答えたのは竜二だった。

「決まってるんだろ。誰にも負けねえことだよ。金でも、腕力でも、なんでもいい。

誰にも文句言わせねえで、自分の思い通りにできる。他人に頼ったり、ましてや頭を下げたりする奴は、全員、弱い」

その意見に、真っ向から反対するように陽奈が言った。

「私は、諦めないことだと思います！ 試合に負けても、失敗しても、『次は絶対やるぞ！』って、また立ち上がれる心が『強さ』だと思います！」

大輝が、静かに、しかしはつきりと自分の考えを述べた。

「……自分の弱さを、ちゃんと知ってることだと思います。弱い自分を知ってるから、それに流されないようにできる。それが、本当の『強さ』なんじゃないかと思えます」

海翔は、少し悩みなながらも、自分の言葉を探すように言った。

「難しいな……。俺は、誰かを許せることちゃうかなって思う。相手の失敗も、自

分の負けも、受け入れて次に進めること。自分の正しさだけにこだわらへん、心の広さみたいなもんが『強さ』やと思うわ」

拓也は、分析するように言った。

「感情に流されずに、自分の目標を達成するために、やるべきことを冷静にやり続けられる能力、だと思います。たとえば悔しくても、その感情を次の計画の材料にできることが『強さ』です」

美緒は、おずおずと、でも芯のある声で言った。

「……誰かに、優しくできることだと思います。自分がつらい時でも、困っている人に手を差し伸べられるような……。そういうのが、本当は一番『強い』んじゃないかなって……」

咲は、にこにこしながら言った。

「うーん……。どんな時でも、自分が『楽しい！』って思えることを見つけられるのが、強いってことだと思います！ 負けても、『タワーが芸術的だったからいいや！』みたいに思えることかなってー」

「『力』ってキーワード出てきたな。『力を持ってる』と『強い』って同じ意味やらか？ みんなはどう思う？」

先生が新しい問いを投げかけると、クラスは一瞬「え、同じじゃないの？」という空気になったが、すぐに生徒たちはその言葉の奥にある深い意味を探り始めた。竜二が、当然だという顔で即答する。

「は？ 同じだろ。力があんだから強い、強いから力があんだよ。ごちゃごちゃ言葉遊びしてんじゃないよ。結局、最後に立ってる奴が強えんだ」

その意見に、海翔が静かに、しかしはっきりと反論した。

「全然違うと思うわ。『力を持ってる』っていうのは、ただの状態でしかない。すごいエンジン積んだ車みたいなものや。でも『強い』っていうのは、その力をどう使うか、その使い方を知ってるってことやと思う。いくら力があっても、それを振り回すだけなら、それはただの暴走や。本当の『強さ』は、その力をコントロールできる心の方にあるんじゃないかな」

拓也も、その意見に続く。

「僕も違うと思います。『力』は、持ってるだけでは意味がない資産のようなものです。『強さ』とは、その持っている『力』を、目的を達成するために適切に、効果的に使える能力のことだと思います」

美緒は、自分の考えを述べる。

「違うと思います……。力は、人を傷つけるためにも使えるけど……。本当の強さは、優しさのために使うものだと思います。自分の力を、誰かを守るために使える人が、強い人なんだと思います」

最後に、大輝が、ぽつりとつぶやいた。

「……力を持っても、自分の弱さを知らなければ、その力に自分が振り回されると思います。……だから、『強い』人っていうのは、力を持っても、それを使わないでいられる人のことかもしれません」

陽奈と咲も、海翔たちの意見に深く頷き、竜二の答えとの違いに驚いている。

「お、みんなええやん。同じに見えるかもしれないけど、まあ、僕がわざわざ問いかけるってことは『違うと考えてる』ってことやな。言うてくれた中に近い意見がいっぱい出てたんやけど、僕は『力を正しく使えること』が強さやと思うわ。海翔くんが言うてくれたかな？ 『コントロールすること』こそが強さ」

先生が、海翔の意見を優しく拾い上げながら自身の考えを述べると、教室の生徒たちは、これまでのもやもやが晴れていくような、スッキリとした表情で深く頷いた。

名指しされた海翔は、照れくさそうに頭をかきながらも、嬉しそうに言った。

「……はい。ありがとうございます。先生の『正しく使えること』っていう言葉を聞いて、俺も、もっと考えがはっきりしました」

その一方で、竜二は、自分の意見が完全に否定された形になったが、反発する様子はない。ただ、静かに自分の席で、何かを必死に考えているように、唇を固く結んでいる。「力」とは何か、「強さ」とは何か。彼の頭の中で、新しい価値観が生まれようとしているのかもしれない。

他の生徒たちも、それぞれが口にした「優しさ」「諦めない心」「目標達成能力」といった様々な「強さ」が、全て先生の言う「力を正しく使うこと」に繋がるのだと、納得した様子だった。

「力にもいろいろある。もちろん実力で『勝つ』ってのも強さや。でも『勝つ』のが強いわけじゃない。『勝てるように力を出せた』のが強いんや。だから逆に、負けたとしても、勝つという目標のために『最善の力の使い方』をできたんなら強いだよ」

その言葉を聞いた瞬間、陽奈と美緒は、息をのんだ。二人の目から、まるで肩の荷が下りたかのように、力がふっと抜けていく。負けることへの恐怖や、申し訳なさから解放されたような、晴れやかな表情で顔を見合わせた。

海翔は、隣で小さく「……すげえな」と呟き、心からの尊敬を込めて先生を見つめている。拓也と大輝も、これ以上ないほど完璧な定義を聞いたというように、深く、ゆっくりと頷いた。大輝の口元には、珍しく、かすかな笑みさえ浮かんでいる。そして、竜二は、全ての鎧を剥がされたように、ただ呆然と先生を見ていた。「勝つか負けるか」それだけだった彼の世界に、全く新しい価値基準が示された。その目は、もはや反抗的ではなく、未知の考えに初めて触れた、ただの少年の目になっていった。

「どうやらか、みんな。『今なら分かる気がする……』？」

先生が、物語の中の明子のセリフを引用すると、生徒たちは、この二日間の授業で自分たちがたどってきた心の道のりを、その一言に重ね合わせるように、深く頷いた。陽奈が、はい！と手を挙げる。

「すぐぐ分かります！明子さんは、ただ負けて悔しいだけじゃなくて、監督が言っていた『心を忘れた挨拶』をしちゃった自分に気付いたんだなって……。先生が教えてくれたみたいに、『ありがとうございました』ってちゃんとと言えるのが『強さ』なんだって、その意味が、今なら分かるってことだと思います！」

海翔も、力強く頷いた。

「俺も分かる気がするわ。明子さんは、敏和の話を聞いて、『負け』がただの終わりやなくて、次に強くなるための『始まり』なんやなって気付いたんやと思う。だから、自分の失敗をちゃんと受け止めて、次に進めるって思えたんやないかな」そして、これまでで一番静かな、しかし一番はつきりとした声で、竜二が、誰に言うでもなく呟いた。

「……まあな。自分の負けを人のせいや運のせいにして喚いてるだけじゃ、ダメセエってことだろ。……それを、分かったってことじゃねえの」

竜二のその言葉に、クラスの全員が息をのんだ。他の生徒たちも、もはや何も言うことはない、というように、静かに、そして深く頷いている。物語の中の明子の気付きは、今、教室にいる全員の気付きとなっていた。

「みんなそれぞれに言葉を受け取ってくれたな。自分の負けを認めることも強さや。負けを認めるからこそ『ありがとうございました』が言える。ほんで、心の底からの『ありがとうございました』が次へのステップになるんや」

一つ一つの言葉が、生徒たちの心に深く、深く刻み込まれていくようだった。七人の生徒たちは、誰一人、声を発しない。ただ、まっすぐに先生を見つめている。

悔しさを乗り越えようとする陽奈の目。優しさの意味を考え続ける美緒の目。物

事の本質を探索する拓也と大輝の目。仲間を思う海翔の目。遊びの中に真理を見つけた咲の目。そして、うつむくのをやめ、先生をじっと見つめ返す、竜二の目。

その全員の眼差しが、「ありがとうございます」という言葉の、本当の重みと温かさを、今、確かに理解していた。

「じゃあ、31ページの一冊最後。『敏和のツツコミに明子と智子は笑ったが、僕は笑えなかった』ってあるけど、なんでやろか？」

先生の問いに、生徒たちは物語の最後の場面、主人公の心の中に意識を集中させた。拓也が、まず状況を整理するように言った。

「敏和くんや明子さんが話している『負けを認める強さ』を、主人公自身が、将棋の対局でもネット将棋でも、全くできていなかったからです。二人の会話が全部自分のダメだった行動に突き刺さって、笑える状況じゃなかったんだと思います」
陽奈は、その気持ちに共感する。

「罪悪感だと思います！ 敏和くんたちはすぐレベルの高い話をしてるのに、自分は時間稼ぎしたり、通信切ったりっていう、卑怯なことばかりしてたから……。みんなが眩しく見えて、自分だけが仲間外れみたいな気持ちになったんじゃないかな」

最後に、竜二が、目を伏せたまま、絞り出すように言った。

「……あいつらみたいに、『深いこと』を言い合える輪の中に、自分はいれねえって思ったからだろ。自分だけが、まだ言い訳して逃げてる、一番ガキだってことに気付いたんだよ。……そんなとき、笑える奴はいねえ」

竜二のその言葉に、クラスの誰もが、主人公の最後の気持ちを、そして竜二自身の心の変化を、はっきりと理解した。美緒や大輝も、深く、静かに頷いている。

「このときの『僕』、いろんなことを考えてそうやな。全部正解やと思う。でも、一個思うんやけど、『僕』十分凄くない？ このちよつとした会話でそこまで考えて自分の行動を見返せる。立派すぎると思うんやけど」

先生の言葉に、生徒たちはハッとした。今まで主人公の「ダメな部分」ばかりを見ていたが、先生は、その心の「動き」そのものに光を当てた。

海翔が、感心しきったように息を漏らした。

「……ほんまや。俺らはいいつのこと『ダサイ』とか言うてたけど、自分のダメなところと向き合うって、一番しんどいことやもんな。それを、この瞬間にちゃんとできてる。……確かに、すごいことかもしれん」

陽奈や美緒も、「そっか……」と、主人公を見る目が優しくなっている。

そして竜二は、ずっと伏せていた顔を、ゆっくりと上げた。その目には、もう怒りや苛立ちはない。ただ、自分と同じように、痛みの中で何かを見つけようとしている物語の主人公と、それを「立派だ」と言ってくれた先生のことを見つめていた。「ほなら、最後のテーマや。28 ページで敏和は『僕』によって引き分けに持ち込まれても嫌そうな顔をしなかったよな。なんでやろう?」

先生がその最後の問いを投げかけると、生徒たちは「確かに……」という顔で、物語の最初の場面を思い返していた。最初に、海翔が、少し考えながら口を開いた。

「ほんまやな……。俺やったら、絶対『は? ふざけんなよ』ってなるわ。うーん……。多分、敏和はもう、勝負の勝ち負けだけを見てへんかったんやないかな。主人公が時間稼ぎを始めた時点で、『ああ、こいつはまだ、負けを認められへんのやな』って、相手の心の弱さを見抜いてた。だから、もう勝負の結果はどうでもよくなって、嫌な顔もせんかったんちゃうかな」

拓也も、その意見に同意する。

「僕もそう思います。将棋は論理のゲームなので、盤面を見れば、勝敗は明らかでした。敏和からすれば、自分が勝っていることは確定していた。だから、主人公

が『引き分けにしよう』と言ったのは、ただの負け惜しみにしか聞こえなかった。事実上の勝利は変わらないので、感情的になる必要がなかったんだと思います」すると、美緒が、少し違う、優しい視点から言った。

「もしかしたら……ただ、優しかったのかもしれないです……。主人公が、すごく悔しがつて、負けを認めたくないっていう気持ちが、敏和くんには分かったから……。ここで『僕の勝ちだ』って言ったら、主人公がもっと傷つくと思って、黙って駒を片付けたのになって……」

最後に、竜二が、ぽつりと、しかし核心を突くように呟いた。

「……自分も、昔はあんなんだったからじゃねえの。ネット将棋始めたばかりの頃は、負けるのが怖くて、同じようなことしてたのかもしれない。だから、今の主人公の気持ちが、痛いほど分かった。……だから、何も言えなかったんだろ」

竜二のその言葉に、教室は静まり返った。誰もが、その可能性を考えてもみなかったからだ。もしかしたら敏和も、最初から強かったわけではなかったのかもしれない。その深い洞察に、生徒たちはただ、静かに頷いていた。

「竜二くんのその視点は全くなかったわ。言われてみたらその可能性もあるな！

僕的には、敏和くんはただ対局を楽しんでいて、時間稼ぎやと分かりつつも、盤

面が優勢になっていくのが楽しかった。だから勝負がついてなくても満足だったのかなって」

先生の言葉に、咲が「あ！」と声を上げた。

「それ、どうぶつタワーバトルとちよつと似てるかも！ 勝敗が決まらなくても、すごい芸術的なタワーが作れてる途中だったら、それだけで楽しいです！ 敏和くんも、すごいカッコいい将棋の形が作れて満足だったのかな！」

咲の言葉に、クラス全体が「ああ、なるほど」という空気に包まれる。生徒たちは、竜二が出した「相手の過去を想像する」という深い共感の視点と、先生が提示した「勝負のプロセスそのものを楽しむ」という純粋な視点、その両方の可能性を味わっている。

「おっしゃ。今日の授業の内容はこの辺にしとくか。今日もいろんな考えが出てきて、想像以上に濃い授業になったな。ほんで、竜二くんが最後にくれた視点。相手のことを想像しろってのは僕もよく言うけど、『過去』までは見れてなかったかもしれない。めちゃくちゃ良い考えを発表してくれてありがとうな」

先生に名指しで意見を褒められた竜二は、少し照れ臭そうに、でも誇らしげに先生を見つめる。

「ほんなら最後、授業の最初に配ってたワークシートに感想とか考えたことまとめておいて。自分の中で成長した部分があれば、自信もって僕に自慢してな。ほな書いてもらって、書いたら後ろから前に回していつてか。焦らんでいいよ。ゆっくり授業を振り返ってな」

生徒たちは、この濃密な時間が終わることを惜しむように、そして、自分の中に生まれた新しい考えを確かめるように、静かにワークシートに向かった。

教室には、心地よい鉛筆の音だけが響いている。

やがて、全員が書き終え、集められたワークシートが、先生の元へ届けられた。

「起立！」

海翔の号令で生徒たちは一斉に立ち上がる。

「ありがとうございます！」

深く、長いお辞儀。顔を上げた七人の表情は、前回とは比べ物にならないほど、豊かで、強く、そして優しかった。

先生は一瞬目を丸くし、そして嬉しそうに言った。

「おお！ 今日みんなから率先して挨拶してくれたんやな。ほなら終わります。ありがとうございます」

道徳ノート3 言葉と気持ち

挨拶されるとどう感じるか？

- ・ 気合が入る。嬉しくなる。
- ・ 安心できる。温かい気持ちになる。
- ・ 一人の人間として尊重されている。相手の健闘を讃えたいくなる。
- ・ スッキリする。後腐れなく次の対戦に移れる。
- ・ 「仲間が見つかった」「またよろしくね」
- ・ 相手と繋がっている感じがする。
- ・ 当たり前。事実確認。

「強さ」とは何か？

- ・ 誰にも負けないこと
- ・ 諦めないこと
- ・ 自分の弱さを知っていること

- ・誰かを許せること
- ・冷静に目標を達成し続けられること
- ・優しくできること
- ・いつでも楽しめること

この時間のまとめ

- ・挨拶はコミュニケーション
- ・力を正しく使うことこそが強さ
- ・自分の弱さを認めることが成長への第一歩
- ・相手の過去をも想像すること

内容項目

- (4) 希望と勇気、克己と強い意志
- (3) 向上心、個性の伸長
- (7) 礼儀
- (22) よりよく生きる喜び

ワークシート2

陽奈のワークシート

監督の「強くはなれないぞ」の意味が、やっと分かりました。悔しい気持ちに負けないで、相手にちゃんと「ありがとう」って言えるのが強さなんですな。「私の成長（自慢！）」次の試合、もし負けても、ちゃんと相手の目を見て「ありがとうございました！」って言えると思います。悔し涙と一緒に、ちゃんと言えるようになりたいです！

先生より

うん！ きっと相手だけじゃなく、陽奈さん自身も気持ちよく終われると思う。挨拶でどんだん心の輪を広げていこう！

美緒のワークシート

私は、勝負も、強い言葉も苦手でした。でも先生やみんなの話を聞いて、本当の強さは、優しさや自分を大切にすることの中にもあるんだと分かりました。

「私の成長」「強さ」という言葉が、怖くなくなりました。私にも、私なりの強さがあるのかもしれないって、初めて思えました。

先生より

そうや。絶対に美緒さんの中にも強さはある。きっとそれは美緒さんの今まで想像していたような強さではなくて、もっと優しくて柔らかい強さだと思う！

拓也のワークシート

「力を持つこと」と「強いこと」の違いを、論理的に理解できたのが一番の収穫です。強さとは、力の適切な「使い方」である、という結論に納得しました。

「僕の成長」スポーツマンシップや挨拶の必要性を、感情論ではなく、「合理的で、成長に必要なシステムだから」と、自分の言葉で説明できるようになりました。

先生より

「力」と「強さ」って似て非なるものだったね。一見すると論理なんて全然関係なさそうなのに。挨拶やスポーツマンシップも軸は感情論なんだけど、その感情論と論理の組み合わせが人の心を揺さぶるのかもしれないね。

海翔のワークシート

今日の授業の最後、竜二が言った「相手も昔はそうやったんかも」っていう視点には、正直、頭を殴られたような衝撃があったわ。俺は、目の前の相手のことしか考えてなかった。

「俺の成長（自慢）」クラスの仲間から、「本当の想像力」とは何かを教えてもらった。これは、この授業で一番の宝物や。

先生より

最高やん！ 身近な仲間からの学び。竜二くんの意見には僕も衝撃受けたわ。これからも、いろんな角度から「想像」していこな！

咲のワークシート

先生が、「楽しむのが強さ」って意見を認めてくれたのが、嬉しかったです！「私の成長」私の考え方は、ただの「ズレてる」だけじゃないのかもって、ちょっとだけ自信が持てました。ネットの相手にも、この「楽しい」気持ちが伝わるように、これからはカピバラのスタンプだけじゃなくて、「ありがとう」のスタンプも押そうと思います！

先生より

うん！ 強さにはいろいろあって、もちろん楽しむことも強さなんやな。咲さんの持つ強さも大事にしよう！

竜二のワークシート

「成長した部分？」最後のやつ。敏和がなんでムカつかなかったのか考えた時、「あいつも昔は主人公みたいにダサかったんかも」って思ったこと。先生がそれを「めっちゃくちゃ良い視点」って言った。人の過去を想像するなんて、考えたこともなかった。そういう考え方は、まあ、悪くねえのかもな。

先生より

あの視点は、まじで感動した。竜二さんにしかない視点、それを思いつく想像力。竜二さんの持つ強さの一つやな。人だけでなく、その過去にも目を向ける。僕の成長にも繋がったわ。ありがとうな！

大輝のワークシート

「自分の弱さを知ることが強さ」だと、僕は思っていました。でも、それだけじゃなかった。海翔くんの「許す強さ」、美緒さんの「優しくする強さ」、そし

て竜二くんの「相手の過去を想像する力」。全部が繋がっているんだと分かりました。

「僕の成長」一人で考えているだけじゃ、たどり着けない答えがたくさんあると知りました。みんなと話すことで、自分の考えも、もっと強くなるんだと感じました。

先生より

そうやな。新しい考えに触れることで、自分の考えをアップデートできる。
良い意見をどんどん取り入れて、大輝くん自身の考えをどんどん強化していこう！

授業後の先生の日記

竜二くんがめっちゃくちゃ良い意見を発表してくれて、どちゃくそに感動した。

「相手の過去を想像する」

その人が乗り越えてきた痛みを想像することもあるんだ。生徒たちにも一人過去がある。その過去すらも尊重していきたい。自分の道徳観もアップデートしていこ。

休み時間 1 とある日の朝

休み時間、廊下は生徒たちの賑やかな声で満ちている。その喧騒の中、先生は向こうから歩いてくる陽奈たちに気付いた。

「あ、先生！ おはようございます！」

「先生、おはようございます。昨日はめっちゃ頭使いましたわ」

陽奈と海翔が、元気よく声をかけてくる。隣で美緒がぺこりと小さくお辞儀をした。

「おはよう。いやあ、みんないっぱい考えてくれて嬉しかったわ」

先生はとても嬉しそうに話す。

その少し離れた場所を、竜二が通り過ぎようとしていた。彼は一瞬ためらった後、目を逸らしながら、でもはつきりと聞こえる声で言った。

「……おはようございます」

「はい、おはよう！ ……ほんま竜二くんは……、もう……」

海翔と陽奈は竜二の挨拶に少し驚きつつも、嬉しそうにぼそっと呟く先生を見て

温かい気持ちになった。

竜二の後ろ姿を見ながら少しの余韻に浸った後、先生は三人の方に向き直した。

「ほなら三人とも、この後の授業も頑張ってな！」

「はい！」

陽奈たちは強く頷き、やる気に満ちた顔で教室に戻っていった。

4 時間目 思考実験 「落ちている財布」

善き「動機」は、常に善き「結果」をもたらすとは限らない。この自明の事実は、道徳を考える上で最も困難な壁の一つとして、私たちの前に立ちはだかる。

道徳の教科書に描かれる物語は、しばしば親切が感謝で報われる、美しい世界を提示する。しかし、その純粋な世界観だけで、私たちは現実社会の理不尽と向き合うことができるだろうか。善意が裏切られ、正しさが罰せられる可能性に直面したとき、なお、私たちは善き動機を貫くことができるのだろうか。

この時間は、これまでとは異なり、一つの思考実験を通して生徒たちの倫理観を極限まで揺さぶるシミュレーションである。題材は、「落ちている財布」という、誰もが遭遇しうる日常的なジレンマだ。

2時間目、3時間目で築き上げてきた「自分自身の誇り」という内なる基準は、

不条理な結果を前にしても、なお行動の指針となりうるのか。動機と結果がねじれた世界で、人が最後に信じられるものは何か。その根源的な問いを、この思考実験は私たちに突きつける。

先生が教壇に立ち、にこやかに告げる。

「おはよう。今日も授業始めていこうか。道徳の授業を始めます。お願いします」

生徒たちの声が、これまでで一番揃って、力強く響いた。

「お願いします！」

生徒たちは、先生の言葉に合わせて一礼する。今日は机の上に教科書はなく、皆、これから何が始まるのか、少し緊張した、それでいて好奇心に満ちた顔で先生を見つめている。竜二も、肘をつくことなく、まっすぐに先生の方を向いていた。「まずは前回のワークシートと今日のワークシート配っていくから、自分の分として後ろに回していいか」

いつものように、生徒たちに二枚のプリントが配られた。

「今日はな、教科書使えへんねん」

先生はそう言うのと、黒板にチョークで大きくテーマを書き出した。

「今回は『動機と結果』について考えていこうと思う。かなり頭を使ってもらふことになるから、その前に、ちょっと肩慣らしの思考実験をしてみよう」

教科書がない授業に、生徒たちは少し戸惑いながらも、興味津々のようだ。先生は一つ目の状況設定を投げかける。

「想像してみてほしい。みんなは、満員電車で運良く座ることができた。次の駅で、お年寄りの方が一人乗ってくる。みんなは、親切心からその人のために席を立った。『どうぞ』って。……ここまでは、よくある話やな」

生徒たちが頷く。

「でも、その人は『ありがとう』と言いつつも、少し迷惑そうな、気まずい顔をしている。もしかしたら『年寄り扱いされた』と思われたのかもしれないし、次の駅ですぐ降りるつもりだったのかもしれない。真意は分からないけど、少なくとも、君が想像していたような満面の笑みではなかった」

教室に少し考える空気が流れる。

「さて、ここで質問。みんなの『席を譲る』という行動は『良いこと』だったんや

ろうか？　そして、もし次から同じような場面に遭遇したら、みんなはまた席を譲る？」

最初に竜二が勢いよく答える。

「は？　譲ってやんねえよ。嫌な顔されてまで譲ってやる義理なんかねえんだから」
陽奈は迷いながらも答える。

「……私は、たぶん譲ると思います！　譲ることが悪いことだとは思わないので！」
海翔は譲りかたに注目する。

「席を譲るのは良いことやと思うけど、嫌な顔をされたってことは、譲りかたが悪かったんかもしれん。だから俺は譲りかたに気をつけて譲るかな」

大輝も答える。

「僕は、譲れる自信がありません……。嫌な思いをさせてしまうのは怖いので……」
「そうやんな。嫌がられたら次から怖くなるかもやんな。僕も自信ないわ。でも、実際にいっぱい譲ってきた」

先生の言葉に、大輝や美緒は不思議そうな顔をする。

「これは、慣れてきたら分かる。『あ、この人困ってるな』『この人はプライド高くないから譲ると揉めてまうな』って。その直感を信じて話しかけるんや。『僕立つ

んで、もしよかったら座ってくださいね』って。でも身動きとれないくらいの満員では立つことが迷惑になるから譲らんほうがあええかもしれへん。どっちにしても状況判断と言葉選びがポイントやな」

生徒たちは様々な状況に思考を巡らす。

「じゃあ、軽く準備運動ができたところで、今日の本題に入っていこう。財布が落ちてたら、みんなはどうする？」

最初に「はい！」と手を挙げたのは、陽奈だった。

「はい！ もちろん、交番に届けます！」

拓也も、それに続く。

「僕も、警察に届けます。トラブルを避けるために、中身には触らずに、そのまま。それが一番、合理的だと思うので」

美緒も、小さく頷いた。

「私も、届けます……。落とした人、すごく困っていると思うので……」

三人の模範的な答えが続いた後、竜二が、鼻で笑うように言った。

「……中身見るだろ、普通。金が入ってたら、ぶっちゃけ、ちょっとぐらいなら抜き取るかしんねえ。で、財布はどっかのポストにでも入れとくわ」

竜二のその言葉に、教室の空気が一瞬で凍りついた。陽奈や美緒は「え……」と信じられないという顔で彼を見て、海翔は「おいおい……」と言いたげに、やれやれと首を振っている。

先生は、竜二の意見を真正面から否定せず、少し面白そうに、しかし巧みに議論を先送りにした。

「あらら、中身抜き取っちゃうか。いったん抜き取ったお金はお財布に戻して、交番に届けたところ想像して続き行こか。ここの議論は後半でやるな」

竜二は、「ちっ」と小さく舌打ちをしたが、特に反論はせず、不貞腐れたように黙る。陽奈と美緒は、ほっとした表情で胸をなでおろした。海翔と拓也は、「なるほど、うまいな」とでも言うように、先生の進行に感心して頷いている。

「交番に届けたら、お財布には五万円入ってたんやってさ。ごっつい大金やな。ほんとでその日は手続きして帰った。そしたら三日後、交番から『持ち主が見つかった。お礼がしたいから来てくれ』って連絡がきたから、交番へ行った。持ち主からは、お礼として感謝の言葉と一万円をもらった。お礼をもらってどう思う？」

先生が具体的な状況を説明すると、生徒たちの頭の中には、感謝の言葉と一万円札が浮かんでいるようだ。陽奈は、パッと顔を輝かせた。

「えー！ 『やったー！』 って思います！ 『良いことしたら、良いことが返ってきた！』 って感じで、すごく嬉しいです！ ラッキー！」

その隣で、美緒は少し困ったように眉を下げている。

「えっと……嬉しいですけど、なんだか申し訳ない気持ちのほうが大きいかもしれません……。落とした人は、五万円も失くして大変だったはずなのに、その人からお金を貰うのは……。感謝の言葉だけで、十分ですって、断っちゃうかもしれません」

拓也は、腕を組んで冷静に分析する。

「法律で、落とし物を届けた人はお礼を貰う権利があつたはずですよ。だから、当然の権利として、ありがたく受け取ります。感謝の言葉だけで十分ですが、いただけるなら断る理由はありません」

海翔も、拓也と同じく受け取る、と言う。

「俺も、素直に『ありがとうございます』 って言って、いただくかな。落とし主さんの『どうしても、この感謝を形で伝えたい』 っていう気持ちやと思うから。それを無下に断るのも、逆に失礼な気がするしな」

咲は、目をキラキラさせている。

「一万円！ やったー！ どうぶつタワーバトルに課金できます！ 新しいアバターとか、可愛い背景とか買いたいです！ 『落とした人、本当にありがとうございます！』って思います！」

大輝は、少し難しい顔で、静かに言った。

「……嬉しい、とは少し違うかもしれません。その一万円を貰った瞬間に、『財布を届けた』という自分の行動の価値が、その一万円になってしまう気がして……。少し、複雑な気持ちです」

最後に、竜二が、呆れたように鼻を鳴らした。

『「最初から一万だけ抜いて、あとはポストに入れときゃ良かったな」って後悔するだろ。まあ、一万でも貰えるもんは貰っとくけどな。当たり前のこととして金貰えるんだから、ちよろいな」

先生は黒板にメモをしながら、次の問いを投げかける。

「みんなそれぞれ感じることもあるな。『嬉しい』って思った子は、『もし一万円が貰えないと分かっているても届けたやろか？』他のみんなは『お礼の言葉もなく一万円だけ渡されたらどう思うやろう』。それぞれ考えて聞かせてか」

「もし一万円が貰えないと分かっているても届けるか」この問いを向けられた陽奈

と咲は、二人とも、きよとした顔で即答した。

「はい！ もちろんです！ お札がもらえるかどうかは、関係ないです。財布を届けるのは、当たり前のことだから！ ……ちよっとだけガツカリはするかもしれないですけど……、でも、絶対届けます！」

「届けます！ だってお財布を拾ったっていうイベントが発生してるから、それをクリアしないと気持ち悪いです！ 課金できるのは嬉しいけど、それはクリアボーナスみたいなもので、なくても全然大丈夫です！」

「お札の言葉もなく一万円だけ渡されたらどう思うか」こちらの問いを向けられた生徒たちの間では、意見が大きく割れた。美緒は、とても悲しそうな顔をした。

「え……それは……すごく、悲しいです……。お金が欲しいわけじゃなくて、落とした人が『助かった』って思ってくれてたら、それで良かったのに……。なんだか、お金だけで解決されたみたいで、すごく寂しい気持ちになります」

海翔は、少し怒ったような、呆れたような表情だ。

「それは、正直、ちよっと腹立つかもしれないな。『ありがとう』の一言が一番大事なのに、それが無いんやったら、ただ『これで黙っとけ』って言われてるみたいや。金だけ渡されても、全然嬉しくないわ。むしろ、後味が悪い」

その二人の意見とは対照的に、竜二は肩をすくめた。

「別に？ そっちの方が分かりやすくして良いじゃん。ごちゃごちゃ感謝の言葉とかいらねえよ……。目的は金だろ。無言で一万くれるなら、それが一番効率的だ」

先生は頷く。

『お金が欲しいわけじゃないから、貰えなくても届ける』んやな。ええやんか。逆に、お札を言わないと『お金が欲しかったわけじゃないんやけど』って感じやな。まあ、竜二くん的には貰えてラッキーか。じゃあ、みんなはもし『お札がしたいから来てくれ』じゃなく『話したいことがある』と呼び出されて『ここには飛行機の手ケット代として五万五千円入れてた。五千円盗ったやろ！』って言われるとしても届けるやろか？

その究極の問いに、教室の空気が凍りつく。最初に、まるで「ほら、見たことか」とでも言うように、竜二が口を開いた。

「だから言ったんだよ。正直者が馬鹿を見るってな。そんなリスクがあんなら、届けるわけねえだろ。やっぱ、最初から関与らないのが正解なんだよ。見て見ぬふりをする。それが一番賢い」

竜二の冷たい言葉に、陽奈が震える声で反論する。

「酷い……。そんなこと言われたら、めっちゃショックです……。でも……。でも、それでも、私は届けます。だって、届けなかったら、その瞬間に私は本当の泥棒になっちゃうから……。疑われるのは怖いけど、本当の泥棒になるよりは、マシだと思います……」

美緒も、目に涙を浮かべている。

「……怖いです。そんなこと言われたら、どうしたらいいか分からなくなって、頭が真っ白になっちゃう……。それでも……届けないのは、もっと怖いことな気がするから……。たぶん、届けます。でも、すぐく、すぐく怖いです」

拓也は、腕を組んで、苦しそうな顔で唸っている。

「……その可能性が少しでもあるなら、状況は全く変わります。善意の行動が、犯罪の疑いをかけられるという最悪の結果になる。……正直、届けることを躊躇します。しかし、届けなかったことが後で発覚するリスクもある……。どちらのリスクが高いか……判断が、できません」

最後に、海翔が、静かに、しかし強い意志を持って言った。

「……きついなあ。善意が裏切られるって、一番ツライもんな。でも……それでも、俺は届けると思う。相手がどういいう人間かとか、俺がどう思われるかで、自分

の『正しい』と思う行動を変えたくはないから。自分の良心にだけは、嘘はつけへん」

咲、大輝も、言葉を発することができずに、この究極の問いの重さにただ押し黙っている。

先生は、生徒たちの葛藤を静かに見守り、そして、ゆっくりと口を開いた。

「それでもちゃんと届ける子らはすごく強いと思うわ。僕もその可能性を考えると拾うの躊躇っちゃうかもしれないへん。交番が見えるくらい近くにあったら届けるんじゃないかと思う。でも何もない道端とかやと見て見ぬふりするかも。竜二くんが言ってみたみたいに『抜き取っちゃう』っていう可能性すらも否定できひん」

先生の、あまりにも正直で、人間らしい告白に、生徒たちは言葉を失った。完璧で、常に正しい答えを知っていると思っていた先生が、自分たちと同じように迷い、悩み、そして「ダサい」行動をとってしまう可能性を認めた。その事実により、教室は、これまでで最も深く、温かい沈黙に包まれた。海翔が、絞り出すように言った。

「……先生……。自分の弱さを、ちゃんと俺らに話してくれて……。ありがとうございます。……なんか、あんだ、凄えよ」

竜二は、何も言わなかった。ただ、今まで誰にも見せたことのないような、まっすぐで、尊敬の念に満ちた目で、先生のことをじっと見ていた。

「でも、ここで前回にやった『行動基準』を思い出してほしいんや。『自分が自分の行動を見てどう思うか』。僕はそんなん、抜き取るとかダサいなって思っちゃうし、届けたら立派やと胸を張れる。だから、これまでは見かけたら悩みながらも届けてきたと思う。みんなはどうやろう。届けるって言ってくれた子は、なんて言われても、腹は立つかもしれないけど、自分のこと誇りに思わんかな」

先生が、自分自身の心の内を正直に語りながら、生徒たちに最後の問いを投げかける。陽奈が、まっすぐな目で答える。

「はい！ 腹は立つし、すごく悲しいけど……。でも、届けた自分自身のことは、絶対に誇りに思えると思います！ 私は、間違ったことはしてないんだって！」
続いて、拓也が、少し違う角度から、しかしはつきりと口を開いた。

「誇りに思う、というよりは……その行動が『正しい』と、論理的に確信できると思います。僕が財布を届けるという行動は、たとえ僕個人が損をしたとしても、『落とし物は持ち主の元へ返るべきだ』という社会全体の信頼を、ほんの少しだけ強固にするからです。もし、誰もが疑われることを恐れて財布を届けなくなっ

たら、社会全体が被る損失の方が、僕一人が受ける不利益よりも遥かに大きい。だから、社会全体の利益を最大化するためには、たとえ理不尽な目に遭う可能性があっても、届けることが最も合理的な選択になります」

「そうやんな。逆に竜二くんもさ、誰かが自分の財布から抜き取ると見たら『ダメい』って思うんじゃないかな」

先生の視線は、静かに竜二に向けられる。竜二は、何も言わない。クラスの誰とも目を合わせず、ただ、固く唇を結んで、小さく、しかしはつきりと一度だけ、頷いた。その竜二の姿を、海翔も、美緒も、大輝も、咲も、静かに見つめている。教室は、深い納得と、そして、長い対話の旅を終えた者だけが共有できる、穏やかな静寂に満たされていた。

「これもやつぱり『何が正解』とかはない。ただ、自分自身が誇れる行動をしているきたいな。僕ももっと意志の強い人間になりたいなあ。よっしゃ、じゃあ最後ワークシート、いつもみたいに感想書いて、考え方で成長したところは自慢してな。『俺の行動は先生より大人や！』とかでもいいで！ ゆっくり振り返って、書いたら後ろから前に送ってきてか」

先生が、自分自身の迷いまでを素直に語りながら、指示を出す。その言葉と振る

舞いに、生徒たちはもう驚かない。ただ、深い信頼と、少しだけ寂しいような気持ちで、先生の言葉を聞いている。最後の「自慢してな」という優しい挑発に、何人かがクスッと笑った。教室には、穏やかで、集中した静寂が訪れる。

やがて、先生のもとにワークシートが集まる。先生は最後に残った時間で雑談を始めた。

「今日はみんなの意見板書してみたんやけど、僕の授業スタイルに合わへんな。分かる？」

海翔が笑いながら答える。

「確かに！ 先生いつもは板書がない分意見がめっちゃくちや拡がる感じがありますわ。テンポ感も良くて、広く深く議論できてる気がする」

「そうやねんな……。板書ってどうしても時間がかかるし、時間もったいない気がするんよね。まあでも、読み物は読み物で、範読——読み合わせのところで時間かかるんやけどな」

先生は続けて新たな提案をした。

「そうや、道徳とは全く関係ないんやけどさ、みんな僕他の教科の授業、受けてみたくない？」

先生の突然の提案に、生徒たちは一瞬顔を見合わせた後、一斉に、そして嬉しそうにざわめき立った。陽奈が真っ先に食いつく。

「え！ 受けたいです！ 絶対面白いと思います！ 何の授業ですか!？」

海翔も興味津々だ。

「お、ええですね！ 先生の授業なら、どんな教科でも、ただの暗記やなくて『楽しんでそうなるんか』っていう根本から考えさせてくれそうやから、めっちゃ興味ありますわ」

拓也は期待を込めて言う。

「受けてみたいです。先生の教え方は非常に論理的なので、数学や理科のような教科なら、物事の本質がすごくよく理解できるだろうなと期待します」

美緒も静かに同意する。

「はい、私も……。先生の授業なら、きっと楽しいと思います」

咲がわくわくした様子で言う。

「なんの授業だろう！ 図工とかだったら、みんなですごいのが作れそう！」

大輝は、何も言わないが、静かに、しかし強く頷いている。最後に竜二が、少しぶっくらばうに、でもどこか期待を隠せない様子で言った。

「……まあ、退屈はしなさそうだな。……で、何の授業だよ」

全員が、期待に満ちた目で先生のことを見つめている。

「二応理数担当やけど、国語でも英語でも社会でも、数学でも理科でも、なんなら副教科でも。なんでもええよ？　そうやなあ……みんな『これ分からね！』みたいなのある？」

先生の「なんでもええよ？」という言葉に、生徒たちの目が輝いた。普段は聞けないような質問に、少しざわめきが起こる。

「はいっ！　英語が、もう全然分かりません！　単語とか文法とか、ただ『暗記しろ』って言われても、なんでそうなるのか分からなくて……。先生なら、もっと面白い方法で教えてくれそうです！」

陽奈に続いて、美緒が少し恥ずかしそうに言う。

「……私は、数学が少し苦手です……。一度、分からなくなってしまうと、どこから手をつけていいか分からなくなってしまって……。先生の授業なら、質問しやすいかなって……」

拓也は、少し違う悩みを打ち明けた。

「国語の、特に小説を読む授業が苦手です。『このときの登場人物の気持ちを答えな

さい』という問題には、論理的な正解がないように感じます。人によって解釈が違うものを、どう評価しているのかが分かりません」

大輝は、何も言わないが、拓也の意見に深く頷いている。

竜二は腕を組んで、挑戦的に言った。

「別に、分かんねえ科目はねえよ。けど、社会の歴史とかは、やってマジで意味ねえなってると思う。昔の奴らが何したとか、覚えて何になんだよ。今を生きるのに、何の役にも立たねえだろ」

海翔は笑いながら言った。

「はは、みんな正直やな。俺は特に苦手なのはないけど……先生は理数担当なんやろ？ 先生が一番教えたい、先生自身の『専門』の授業を受けてみたいな。数学とか理科とか」

咲は楽しそうに提案する。

「私は、美術の『そっくりに描きましょう』っていうのが苦手です！ もっと、へんてこな面白い絵を描きたいのに……」

「おっしや、ほんなら明日から朝のホームルームの20分、そのうちの10分使って「るい先生のミニ授業」やっていこ！ みんなのリクエストに応えていくから、

また「これ授業してほしい！」が出てきたらいつでも言うてな。ほんなら、明日のミニ授業は……」

先生は一度、拓也と大輝のほうを見て、にやりと笑った。

「国語！『小説どう読もう？』問題」

先生からの「ミニ授業」という新しい提案に、教室の空気が、一気に期待感で色めき立つ。

「ミニ授業！ 毎朝ですか!? やったー！ 小説、私は好きです！ 拓也くんは苦手なんだ。なんでだろう？ 楽しみです！」

「毎朝10分、ええですね！ 集中力も続きそうやし。拓也の疑問から始めてくれるんか。先生、ほんまに俺らのことよう見てくれてるんやな。ありがとうございます」

名指しされた拓也は、少し驚いたように、そして、自分の悩みを真正面から取り上げてもらえたことに少し戸惑いながらも、嬉しそうに言った。

「え……いいんですか？ 僕が苦手だと言った、まさにそのテーマを……。はい、ぜひお願いします。先生が、あの問題をどう『論理的に』扱うのか、すごく興味があります」

大輝も、拓也のほうを見て、深く頷いている。竜二は何も言わないが、腕を組み、面白そうじゃないか、とでも言うように、先生のことを見ていた。

「ほならミニ授業も楽しみにしててや！ 今日ほめっちゃ雑談してもたな。ほな終わるか。ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

先生の新しい試みに、教室の期待は高まっていた。

道徳ノート4 動機と結果

落ちてゐる財布を見つけたらどうする？

- ・拾つて交番や警察に届ける。
- ・中身を抜き取つてポストに投函する。（ダメ。犯罪です。）

お金が貰えなくても届ける？

- ・お金が欲しいわけではないので届ける。

お金だけで言葉がなかったら？

- ・お金が欲しいんじゃないなくて助けたかっただけ。悲しい。
- ・お金で解決されたみたいで腹が立つ。
- ・分かりやすくして良い。効率的。

盗みを疑われるとしても届ける？

- ・悲しい。怖い。ツライ。でも、届ける。

・分らない。

・正直者が馬鹿を見る。見て見ぬふりをする。

この時間のまとめ

・状況判断と言葉選びに注意する。

・たとえ相手に理不尽ことを言われようと、自分の誇れる行動をする。

・理不尽に疑われても、やましいことがないなら誇ればいい。

内容項目

(1) 自主、自律、自由と責任

(5) 真理の探究、創造

(11) 公正、公平、社会正義

(12) 社会参画、公共の精神

ワークシート3

陽奈のワークシート

今日の授業も、すごく頭を使いました！

「私の自慢！」最後の、意地悪な人に泥棒だって疑われる話、すごく怖かったけど、それでも「届けます」って最初に言えた自分を、誇りに思います。悔しい気持ちと、正しいと思う気持ち、両方を大事にできる「強さ」を、少しでも持てた気がします！

先生より

怖さに負けずに信念を貫く姿勢、めっちゃくちゃ素晴らしいよ。十分強い！ 誇ろう！

美緒のワークシート

先生が「僕も躊躇しちゃうかも」と言ってくれて、すごく安心しました。怖いって思ってもいいんだなって。

「私の自慢」私も、先生みたいに、自分の弱さをちゃんと認められる、そういう正直な強さを持てるようになりたいです。この授業で、本当の強さの目標ができました。

先生より

美緒さんも素直な意見いっぱい聞かせてくれるから「正直な強さ」持っていると
思うよ！ その強さをどんどん伸ばしていこう！

拓也のワークシート

今回の授業で、「動機」と「結果」のどちらが重要かという問いについて、僕は最終的に「社会全体の利益を最大化する結果を導く行動が合理的だ」と考えました。

「僕の自慢」これは、個人的な感情だけでなく、社会全体の視点から道徳を分析する、自分なりの一つの答えです。この考え方を、先生に「大人より大人や！」って自慢したいです（笑）

先生より

社会全体の利益の最大化。めちゃくちゃ大人な考え方や！ 良い視点やで。

海翔のワークシート

先生、最後の問いかけ、しっかり受け取りました！

「俺の自慢」最後の難しい場面で、先生は「見て見ぬふりするかも」と言っただけど、俺は「良心に嘘はつけへん」と言いました。どっちが正しいとかやなくて、あの瞬間、俺は先生よりも少しだけ、理想論者でいられたのかもしれない。生徒が先生の理想を超える瞬間があってもいい、と教えてくれた先生の授業こそが、一番大人やと思います。ありがとうございました。

先生より

「良心に嘘をつかない」ってめちゃくちゃ強いと思う。心に従う海翔くんではない！

咲のワークシート

財布を届けて、怒られたらすごく悲しいです。でも、届けなかったら、拾ったお財布がずっと私の部屋にあることになって、そっちのほうがもっと気持ち悪くなって思いました。

「私の自慢」だから、私はちゃんと「クリア」したいです。途中で投げ出すの

は、どうぶつタワーでも、道德でも、嫌だなんて思えるようになりました！

先生より

そやな。最後までクリアして、スッキリした気持ちで次に進みたいね。

竜二のワークシート

「俺の自慢」最後の質問で、先生に「自分の財布から金抜かれたらダサいって思うだろ」って言われた時。昔の俺なら、絶対何か言い返してた。でも、先生の言う通りだと思ったから、何も言い返さなかった。……それが、俺のこの4時間の、全部だ。

先生より

素直な反応を見せてくれてありがとうな！ 自分と向き合って、素直な反応を見せてくれる。それで十分や。

大輝のワークシート

先生が最後に「僕も見えて見ぬふりするかも」と言った後に、「でも、自分の行動をダサいと思う」と言ったことが、全てだと思いました。

「僕の自慢」 本当の強さとは、常に完璧な行動をすることではなく、自分の心の「ものさし」から逃げないことだと理解できました。先生が、ご自身の弱さを見せて、本当の強さを教えてくれました。

先生より

自分の心の「ものさし」か。大事な。ものさしから逃げないように、道徳は骨の髄に刻んでこな！

授業後の先生の日記

今日の授業では生徒たちに自分の弱さをさらけ出した。

「何か言われるくらいならお金を抜き取ってしまうかも」

もちろんダメなこと。生徒たちにもしてほしくない。でも僕はあの子たちを信頼している。だからこそ弱さを見せられるし、逆説的な見かたも伝えられる。やっぱり僕にとって生徒たちの存在は大きい。

休み時間 2 呼び出し

「二年二組、山本くん。一年二組、山本竜二くん。今すぐ職員室、るいのところに来なさい」

職員室のドアが、少しだけ乱暴にガラッと開く。他の先生たちがちらりとそちらを見るが、気にせず、竜二が中に入ってきた。きよろきよろと室内を見回し、るい先生の姿を見つけると、ポケットに手を突っ込んだまま、だるそうに、しかし真っ直ぐに先生の机までやってくる。

「……呼びました？ 何か用すか」

「うん、呼び出したってことは用事や。みんなの前で話したら恥ずかしいかなと思っ
て呼び出しちゃった。竜二くんさ、この一か月ぐらいの間だけで、だいぶ考
え方変わったんちゃう？ さっきの授業のワークシートで自慢してくれてたや
つ。めちゃくちゃええやんか。何も言わなくても、問いかけに頷いてくれただけ
で、自分の考えとか気持ちを素直に表してくれて嬉しかったで」

先生のまっすぐな言葉に、竜二は思わず目を逸らし、頭をガシガシと掻いた。

「……別に。変わってねえし。……あんたが、変なことばっか訊いてくるからだろ……。それに、あの頷いたやつ、見てたのかよ。……きも」

「はあい、きもくて結構です。みんなのことちゃんと見てるからな笑笑　ほんまに。最初の尖った感じの竜二くんも芯があってカッコよかったけど、いろんな意見に耳を傾けるようになってくれた今の竜二くんはもつとカッコいいと思うで。竜二くんの意見も授業に必要なスパイスになってるから、これから素直な意見いっぱい聞かせてな」

「……勝手にしろよ……」

それは、彼の最大限の「分かりました」であり、「ありがとうございます」だったのかもしれない。耳まで真っ赤になった顔を隠すように、竜二はそっぽを向いて、もう何も言わなかった。

「うん、勝手にさせてもらう笑笑　ほな次の授業も頑張つてな。行ってらっしゃい」先生の温かい言葉に、竜二はもう何も言えなかった。ただ、部屋を出ていくその直前、くると先生の方に向き直ると、深く、少しだけぎこちないお辞儀を一つした。そして、返事もせずに、照れ隠しのように足早に職員室を出ていった。その背中は、来たときよりも、ほんの少しだけ、まっすぐに見えた。

ミニ授業 1 国語「小説の読解」

翌朝、ホームルームのチャイムが鳴り終わると、先生はすぐに教壇に立った。いつもより少しだけ、生徒たちの視線が期待に満ちている。

「お願いします！」

生徒たちの声が揃う。

「今日は特に連絡事項なし！ ほなら早速やけど、ミニ授業やっていいか。僕も昔は国語の小説が苦手やったのよ。『小説って読む人によつて解釈違うのが良いんじゃないの？』『それを答え決めてまうの？』って思ってたから。でも、国語での解釈の『正解』って、実は『間違いない』ってことなんや」

先生が、自分も国語が苦手だったという意外な告白をすると、教室、特に拓也と大輝の空気が少し変わった。彼らは、先生が自分たちと同じ悩みを共有していた

ことに、驚きと親近感を覚えていようだ。そして、先生が提示した『正解』は『間違いじゃない』こと』という、一見、禅問答のような言葉に、生徒たちは首を傾げている。

「……『正解』は、『間違いじゃない』こと……。すみません、先生。まだ、ちょっとよく分かりません。間違いじゃなければ、複数人が違う答えを言っても、全部正解になる、ということですか？それとも、『間違い』な解釈というのが、何か明確にある、ということでしょうか？」

拓也の問いに、海翔が自分なりの解釈を重ねる。

「なるほど……。つまり、小説の中に書いてあることを根拠にしていれば、Aさんの解釈もBさんの解釈も『間違いじゃない』。でも、全く書いてないことを勝手に想像して『こうに違いない！』って言うのは、『間違い』になる。……そういうことですかね？」

陽奈や美緒も、二人のやり取りを聞きながら、うーん、と唸っている。竜二も、腕を組んで、その言葉の真意を探るように、じっと先生を見ていた。

「解釈には押さえるべきポイントがあって、『間違いじゃない』ってのは、押さえるべきポイントを押さえてる、ってことなんや。それを外せば『間違い』になる」

先生の「押さえるべきポイント」という言葉に、教室、特に拓也の目の色が、カッと変わった。

「……！　なるほど、そういうことですか！　つまり、国語の読解は、自由に感想を言うことではなく、文章に書かれている『事実』や『ポイント』を、根拠としてただだけ見つけられるか、という一種の論理パズルなんです。そのポイントさえ押さえていけば、表現の仕方が多少違っても『間違いない』解釈になる……。霧が晴れた気がします。ありがとうございます」

海翔も納得の声を上げる。

「つまり、『その解釈、ちゃんと全部のピース使って説明できてる？』ってことですね。自分に都合のいい部分だけじゃなくて、物語の全部の出来事を説明できるなら、それは『間違いない』。分かりやすいです」

陽奈が声を弾ませる。

「そっかー！　ちゃんとヒントが文章の中に隠されてるんですね！　宝探してみたいで、ちょっと面白くなってきました！」

大輝も、深く、何度も頷いている。美緒も、咲も、そして竜二さえも、先生の示した明確なルールに、これまで抱いていた「国語の授業のモヤモヤ」が晴れていく

ような、スッキリとした表情をしている。

「具体的に、『ネット将棋』の最後の文、『敏和のツツコミに明子と智子は笑ったが、僕は笑えなかった』を国語の文として評価してみよう。『笑えなかった理由』を訊いたとき、みんなは

- ・自分の行動を反省していたから
 - ・後ろめたくなったから
 - ・ズルさと本気で向き合ったから
 - ・自分が一番ガキだと思ったから
- とか出してくれたんよね。これ、全部間違いじゃないの。ちゃんとポイント押さえてる。『自分の過去の行動』と『反省』がポイントや」
- 先生は一度言葉を切り、続けた。

「でも、ここで、『自分のことを言われている気がして腹が立ったから』とかって答えてたら、国語の読解としては間違いや。腹を立てたわけじゃない。反省してるんだから。それはどこで分かるかっていうと、流れや。敏和たちの会話に入ってなかった。これは自分に矢印を向けてるってことや。だから外向きの『腹が立つ』ってのは間違いやってわけや」

先生の、具体的で、非常に分かりやすい説明に、生徒たちは「ああ！」と一斉に声を上げた。特に、最初に疑問を呈した拓也の表情が、みるみるうちに晴れていく。

「……凄い……。完全に理解しました。つまり、登場人物の行動や、逆に『しなかった』行動が、そのときの感情を特定するための最も重要な『根拠』になる、ということですね。『腹が立った』なら、何か反論するはず。でも『何もしなかった』。だから、感情は『内向き』の反省だと判断できる……。これは、数学の証明と同じです。ありがとうございます！」

海翔も興奮気味に言う。

「ああ、なるほど。行動と気持ちがセットになってるってことか。『腹が立つ』っていう気持ちなら、何か言い返す行動に繋がるはずやけど、本文では『笑えなかった』だけで、何もしてへん。だから、その行動と繋がる気持ちは『反省』の方やと。ちゃんと証拠探しせなあかんのやな」

陽奈も納得したようだ。

「そっかー！ だから、ただ『こう思った！』じゃなくて、『だって、こう書いてあるもん！』って言えなきゃダメなんですね！ これなら、私にもできそう

です！」

大輝も、美緒も、そして竜二さえも、深く頷いている。国語の小説問題にあった「正解が分からないモヤモヤ」が、明確なルールによって解消され、教室全体が大きな納得感に包まれている。

「そう。国語で訊かれる内容は、『合理的』やと判断される答えがあるものに限られる。つまり『答えがない』わけではなくて『合理的な解釈が複数存在しうる』ってことなんや。こう聞くと、理系も結構国語に向いてそうじゃない？」

先生の最後の言葉に、教室、特に拓也と大輝の表情が、驚きから、確信へと変わっていくのが分かった。

「はい……！ めちゃくちゃ向いていると思います。今まで、国語はセンスとか、感情の豊かさみたいな、自分にはないもので戦う教科だと思ってました。でも、そうじゃなくて、文章の中から根拠を探し出す『情報処理能力』と『論理的思考力』が武器になるんですね。……それなら、僕にもできる気がします。なんだから、国語が少し、好きになれそうです」

海翔が拓也の肩を軽く叩く。

「はは、確かに。理系のやつら、文句ばかり言うてんと、ちゃんとやったら国語

も得意になれるってことですね。拓也、よかったやんけ」

拓也は、照れくさそうに、でも嬉しそうに笑った。大輝も、深く頷いて、安堵の表情を浮かべている。竜二ですら、「なるほどな」とでも言うように、面白そうに口の端を上げていた。

「ほなら、僕から今日一日の課題として問題を与えよう」

そう言う先生は、生徒たちにプリントを配り始めた。

問題

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1

静かな朝に響き渡る蝉^{せみ}の声。それを美しいと思う日が来るなんて、思ってもみなかった。それまでは五月蠅^{うるせ}いとしか感じなかったその音に耳を澄ますと目を閉じた暗い世界に鮮やかな空色が広がる。あの日、僕の世界に光が差した。

2

白い世界、澄んだ空気、肌を突き刺す寒さ。いつものように自転車で学校へと向かう。(A) ホソウされていないサイクリングロードでは、自転車が激しく跳ねるが、慣れたものだ。

学校の駐輪場に着くと、そこには奈々未^{ななみ}がいた。声をかけ、一緒に二階へ上る。僕は奈々未と喋りながら教室に入った。先に教室にいた秋登^{あきのぼ}がいつものように茶化^{ちあ}してくる。

「お前ら今日も一緒か。絶対付き合ってるやろ。うん、これは絶対にそうやわ」「何言うてんねん。そんなわけないやろ。それ以上言うたら、二度と口きけんよ」
うに引きずりまわすぞ」

決まってこのやり取りから一日が始まる。茶化されても悪い気はしない。むしろ、どこか嬉しいと感じている自分がいる。

僕は人と喋るのがそんなに好きではないが、奈々未や秋登と喋るのは楽しい。僕のことをよく知っていて、扱いが上手いからだろう。

準備を終えてぼーっとしていると、一時間目のチャイムが鳴った。つまらない授業は眠くなる。しかし、英語の授業は違う。仲の良い友達とペアを組むことができるからだ。僕は秋登とペアを組み、会話練習をする。

「What did you do yesterday?」

「I went shopping with my girlfriend.」

「Wait..., what? You have a girlfriend?」
J

「Haven't I told you that?」
K

「Who is your girlfriend?」

Haruna is.」

「When did you two get together?」

「December 13th. I mean, umm..., last month.」

「Oh, I see.」
L you two look happier M

秋登との会話は英語でも弾む。

英語の授業も終わり、その後も数学、現代文、物理、体育、化学の授業を受け、掃除を済ませた。秋登は野球部の練習に行ったが、僕は部活に入っていないのでそのまま家に帰る。今日もいつも通りに一日が終わる、そう思っていた。

ドンッ、ガシャン――

体が宙を舞う。秋登、奈々未、春奈……。仲の良かった友達の顔が頭をよぎる。(X) それと同時に、行事や授業、楽しかった日常も思い出す。僕は……

ドゴッ――

3

ここはどこやろう。俺は今、何をしとるんやろう。今は何時なんやろう。

「悠佑!」

誰かの名前を呼ぶ女の声がする。

「目え覚めたか!」

男と女が俺の近くに駆け寄ってきた。

「悠佑、心配したやんか!」

俺に言うところんか? (i) ユウスケって誰や。そもそも、この子ら誰なんや。

「悠佑、三か月ぶりやな」

「ユウスケって誰ですか？ 俺は——」

俺の名前って何やったつけ。親は……。あれ、名前が思い出されへん。もし
かして……

「悠佑はお前の名前や。学校帰りに車に飛ばされて頭打ったらしいから、記憶
がないんかもしれへんな。車は逃げてもうたみたいやけど、外周を走ってた
サッカー部が見つけて通報してくれたんやっさ。次の日先生から聞いて
びっくりしたわ。しかも全然起きてくれへんのやもん……。心配でたまらん
かったんやで」

「俺、名前とか全然思い出せなくて……。あなたたちは誰なんですか？」

「俺は秋登でこっちは春奈。お前の親友やから敬語使うのやめてくれ」

アキトとハルナか。アキトの喋り方って優しいし……。親友？ こんな美男
美女が俺の親友とか最高かよ。この子ら絶対みんなから人気なんやろうな、え
え子やし。俺って幸せ者やな。

「わかった。名前は呼び捨てでええんかな？」

「うん、いつも呼び捨てやったから、それでええんちゃうかな」

「私も呼び捨てがいい！」

「あつ、あともう一人、奈々未っていう子もおるんよ。さっきまでおったんやけ
ど、外が暗くなったから帰ってたわ。でも、奈々未もお前と毎日一緒にお
る親友やし、明日もまた来るんちゃうかな、⁽ⁱⁱ⁾知らんけど」

「知らんのかいっ」

「おつ、久しぶりのツッコミもキレキレやなあ」

「あ、もうそろそろ時間来ちゃう」

「ほんまや、俺らもそろそろ帰るわ。久しぶりに話せてよかった。じゃあ、また
明日な」

「ありがとう。またね」

アキト、ハルナ、ナナミ、俺はユウスケ。書くもん何かないかな……。あった。

自分の名前はやっぱり漢字で書きたいよな。どこかに……。そうや、部屋の入
り口に——。

あ、そうか。寝たきりやったから、急には動かれへんわ。ナースコール使え
ばええか。

「はい、こちらナースステーションです。根岸様です。どうされましたか？」

「目が覚めたんですけど、移動できなくて……」

「すぐそちらに向かいますね。少しお待ちください」

医者？看護師が駆けつけた。

「気分はどうですか」

「気分は大丈夫なんですけど、記憶が……」

「そうですね、頭を強く打たれたようなので、記憶障害があるかもしれません。

いくつか質問してみますね。ご自身のお名前を教えてください」

「えっと、ネギシ……ユウスケ……です。でも、初めは完全に忘れていて、下の

名前は友達に教えてもらったんです。上の名前はさっきのナースコールで」

「そうですね、分かりました。では、生年月日を教えてください」

「生年月日は……、分かりません」

「では、性別と血液型は分かりますか？」

「性別は男です。血液型は……分かりません」

「学校の勉強について、得意な教科などは覚えていますか？」

「理科と英語が得意です」

「なるほど。得意な教科は覚えているようですね。悠佑さんの血液型から、ご両
親の血液型はどちらもO型以外であると断言できます。ご自身の血液型は分
かりますか？」

「ええっと、**A**型ですか？」

「正解です。理科の知識が残っているようですね。では、現在、世界の血液型の

人口比が⁽ⁱⁱ⁾シユウソクしているとしします。悠佑さんが**A**型であるという

ことは、ご両親がともに**A**型である条件付き確率はいくらでしょうか」

「紙とペンを貸していただけますか？」

「どうぞ」

病院で解く問題にしては、ちょっと難しすぎひんか？ まあええけど。よし、まずは人口比求めていくか。血液型はA B Oの組み合わせで、AAとBBとOOは対称的やし、AOとBOとABも対称的やな。それぞれの割合をsとっておいとくか。ほんで表を書いて……、あ、なんか綺麗な式になりそう。

$s = \frac{Q}{Q+R} = \frac{R}{R+S}$ $t = \frac{T}{T+U}$ か。C型って、計算上はAB型よりもレアなやな。

あとは条件付き確率が……。条件付きとは言いながらも、求めたいのはたどの確率なんよな。子がP型になる確率はTやった。両親も子もP型になったのは全体のVやから、確率は——

「W」です」

「That's correct! Your calculation skill is great! I'm jealous.」

「Why are you speaking English? Would you speak Japanese?」

「英語も身に付いているようですね。学習の方は問題がないようなので、ここからはゆっくりと経過を見ていきましょう」

「あ、俺の名前の漢字を教えていたでもいいですか？」

「(iii) ジジツムコンの根、ヨウガンフソンの岸、ユウゼンジトクの悠、にんべんに右と書いて佑です」

……根岸悠佑、か。漢字で書いてみたけど、やっぱり見慣れへんな。なんやろうこの感じ。俺の中に溜めてきた思い出やら積み上げてきた人間関係だけが、一つ残らず奪い去られてしまったような……。

そう思った途端に目の前の世界が闇に包まれた。

過去を奪われて、どうやって生きていけばええねん。今の俺には何の思い出も残ってないんや。いや、今は悩んでもどうにもなれへん。深く考えすぎるな。無駄なエネルギーを使うな。そうや、今日はとりあえず寝よう。考えるなら、明日起きてからや。

4

やはり俺の世界は暗かった。

午前中には家族が会いに来たが顔も名前も分からなかった。

しかし驚いた。俺が目覚めたことをあそこまで喜んでくれる母がいたとは。喜びすぎて、静かにするように看護師さんに注意されていたのは思わず笑ってしまった。姉は明るく面白い人だった。父は……、つつこみどころの多い人だったけれど、あの感じ、嫌いではない。

名前を忘れる前にメモしておこう。母セイラ、父リュウコウ、姉モネ。

名前をメモしたノート、そこに書かれた名前だけはこの世界で輝いて見えた。空が赤く染まりかけた頃、三人の男女が会いに来た。そのうちの二人は知っている。アキトとハルナだ。ということは……、

「アキトとハルナ、今日も来てくれたんやな。もう一人は、ナナミ？」

「悠佑、よう覚えとったな。そうそう、これが奈々木」

(iv) ナナミの目は、その曇った顔に似合わず、きらきらと輝いている。

「悠佑！」

「くはっ、ちょっと待った！ 落ち着いて。俺、一応病人やから、優しく扱ってちょ」

いきなり抱きつかれてびっくりした。

「え？」

「ん？」

「悠佑、どうしたん」

「いや、事故で頭打って——」

「そうじゃなくって！ 悠佑、今まで『俺』なんか言わへんかったやんか！」

「言われてみれば……、確かに」

「そのの？」

「うん、お前いつも『僕』って言ったわ」

「急に『俺』とか言い出したら……、ギャップ萌え」

「「……えっ？」」

ナナミの発言を聞いて、三人の声が揃った。

「もう、好き」

急な展開に頭が追いつかない。

「どうか、ずっと前から好きやったんよ。付き合ってくれへん？」

返事に困る。ずっと一緒にいた親友ということは、ナナミのことを好きだったのかもしれない。だがそれは過去の俺。今の俺はナナミのことをよく知らない。

「返事は時間ちょうだい。もしかしたら俺も前は好きやったかもしれへん。でも今はナナミのことをよく知らんから、思い出すか知り直すかするための時間が欲しい。返事はそれまで待ってくれる？」

「おけ、急にごめんね」

「……いや、お前ら二人は何ニヤニヤしてんねんっ！」

四人で顔を見合わせて笑いあう。部屋が光に包まれた。

5

許可が出たので、翌週から学校に復帰することになった。朝はナナミが家まで迎えに来てくれた。一緒に学校に行くと、駐輪場にはアキトとハルナもいた。二人とも待っていてくれたのだ。クラスは先月発表されたようだが、三人と同じクラスになっていた。

四人で教室に入ると、クラスがざわついた。

「根岸君が来た！」

「大丈夫やった？」

「待ってたよ！」

俺に掛けられるどの言葉も、温かみを帯びている。だが、顔も名前も覚えていない。

「悠佑は事故の前の記憶がないから、みんなの名前とかは覚えてないと思う。」

でも――

秋登がそう言いかけたとき、みんなはその言葉を⁽⁹⁾「サエギ」った。

「そりゃ仕方ないやろうよ。だってみんなに大きい事故やったんやもん」

「入学した初日は名前知らん人ばかりやったやん？ あんな感じて思ってたらええんとちゃう？ 名前なんかそのうち覚えられるやろ」

「そんなに心配せんでええよ」

眩⁽¹⁰⁾しい世界に目から温かい感情が⁽¹¹⁾フキ出す。

一時間目の授業は現代文だった。出席確認のために名前が呼ばれる。朝のホームルームのときに担任が貰った名簿を見ながら、顔、声、名前を一致させていく。まだ全員の顔と名前を覚えられたわけではないが、暗い世界の中で輝くこの狭い空間には、⁽¹²⁾徐々に色が戻ってきた。

久しぶりの授業で、分らないところがあるかもしれない、そう不安に思っていたが、この一週間奈々未のよくまとまったノートで勉強したからか、今日の授業にはついていけた。

昼休み、俺が弁当を食べ終わってぼーっとしていると、俺の机の周りに五人集まってきた。手にはそれぞれ、数学の問題集、物理の教科書、化学の課題、古典のノート、英語のワークを持っており、教えてほしいと頼まれた。秋登が言うには、これが日常らしい。それぞれに知識を噛み砕いて、なるべく理解が易いように教えていく。みんなが内容を理解して、笑顔でお礼を言ってくれるのが、とても嬉しい。

数学、化学を教え終わり、物理を教えていると、過去に同じように教えていた記憶が急に甦⁽¹³⁾った。それと同時に、行事や授業、楽しかった日常も思い出す。頭の中を駆け巡る記憶に、涙が溢れる。

「え、根岸くん！ どうしたん！」

心配の声を聞いて、秋登と奈々未が駆け寄ってくる。

「んー、へへっ、急に記憶が戻ってさ」

「悠佑……」

秋登と奈々未が、座っている僕に抱きついてくる。僕の名前を呼ぶ二人の声は震えている。途切れぬ涙をぐっと⁽⁶⁾コラえて顔を上げると、周りにいた友達も涙を浮かべている。それを見て一度はコラえた感情が噴き出す。涙を拭っていると、教室のドアが開く。

「はーい、そろそろ……、ん？　おい、どないしたんや！」

「いや、根岸くんが……」

「おう、」

「あの、記憶が、急に戻ってきて……」

「そうなんか！　良かった、ほんまに……、良かった……」

「ちよ、先生まで泣かんといてや！」

教室に涙と笑顔が溢れる。

「よしっ、とりあえず五限目始まるから、一旦切り替えて準備しよ」

先生の声とチャイムの音が重なる。

「じゃあ、授業始めようか。まず、根岸！　先生のこと思い出した？」

「ちゃんと思ひ出しましたよ。暑くる……いや、熱くてめっちゃ頼りになり

ます！」

「おいー、今、暑苦しいって言いかけたやろ！　聞き逃さへんぞ！」

教室に笑い声が響き渡る。僕の見る世界は、眩しく、鮮やかな色に染まっている。黒一色で塗りつぶされたように感じられた世界は、黒色の裏でも絶えず光を放っていた。

そうだ、後で奈々未に伝えなきゃ。ずっと傍にいてくれた奈々未のこと、僕はもちろん――

1. 傍線部 (A) ~ (E) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- (A) ホソウされて
(B) シュウソクして
(C) サエギった
(D) ワき出す
(E) コラえて

2. 空欄 [] ~ [] について、次の問いに答えなさい。

- (1) [] には「なんで教えてくれへんかったんや」という意味の英文が入る。次の () 内の語句を並べ替えて、その英文を完成させなさい。
(didn't / me / tell / why / you / ?)

- (2) [K] には「知ってるもんとってたわ」という意味の英文が入る。次の英文の () 内の動詞を正しい形に直し、その英文を完成させなさい。
I (think) you (know) .

- (3) [L] you two look happier [M] は「だから最近二人して幸せそうにしてたんか」という意味の英文である。[L] と [M] に入る語句を次の ① ~ ⑥ のうちから一つずつ選び、それぞれマークしなさい。

- ① That's because ② That's why ③ Thereafter
④ currently ⑤ presently ⑥ recently

3. 空欄 [P] ~ [W] について、[P] · [U] には血液型、[Q] ·

[R] には s と t の式、[S] · [T] · [V] · [W] には値を、それぞれ答えなさい。

4. 傍線部 (i) について、「悠佑」の発言や思考に出てくる名前の表記には、漢字とカタカナの二種類が混在している。この表記の違いが表す内容として最も適当なものを、次の ① ~ ⑤ のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 事故によって「悠佑」の性格が変わってしまったことを表しており、信義に厚い性格を漢字で、何事もおざなりにする性格をカタカナでそれぞれ表現している。

- ② 事故によって友人との距離感が変わってしまったことを表しており、親しみのある呼び方を漢字で、他人行儀な呼び方をカタカナでそれぞれ表現している。

- ③ 事故によって「悠佑」の感情が大きく変わってしまったことを表しており、前向きな感情を漢字で、ネガティブな感情をカタカナでそれぞれ表現している。

- ④ 事故によって「悠佑」の記憶の種類が変わってしまったことを表しており、視覚的に覚えている名前を漢字で、聴覚的に覚えている名前をカタカナでそれぞれ表現している。

- ⑤ 事故によって「悠佑」が記憶を失ってしまったことを表しており、過去の明るさを漢字で、過去を失った中で見出した未来への希望をカタカナでそれぞれ表現している。

5.

傍線部(ii)について、ここでの「知らんけど」が表す意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 「奈々未」が来るかどうかは知らないが、でたらめな発言をした。
- ② 「奈々未」が来る可能性は高いと考えているが、断言はできない。
- ③ 「奈々未」が来るとは思っていないが、励ますために嘘をついた。
- ④ 「奈々未」が来るとは思っているが、サブライズのために誤魔化した。

6.

傍線部(iii)について、次の問いに答えなさい。

- (1) カタカナで書かれた三つの四字熟語を、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① ジジツムコン
- ② ゴウガンフソ
- ③ ユウゼンジトク

- (2) 医師が口頭でこのように説明した理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 筆記具が手元になかったため。
- ② 四字熟語を使えば伝わりやすいと考えたため。
- ③ 「悠佑」の国語に関する記憶を試すため。
- ④ 難しい伝え方をすることで優越感に浸るため。

7.

傍線部(iv)について、「ナナミ」の目を輝かせていたのは何か。文章の中から一字で書き抜きなさい。また、それと同じものを表す表現を文章から五字で書き抜きなさい。

8.

傍線部(v)について、この作品における「色」は何を表しているか。文章から二字で書き抜きなさい。

9.

この作品の題名は『僕が世界に色を取り戻した日』である。「悠佑」が世界に「色」を取り戻したのはいつのことか。文章中から二字以上六字以内で書き抜きなさい。ただし、書き抜く語の表記は問わないものとする。

10.

この作品の舞台となった県は、南北で気候が大きく異なる。その理由および南部と北部のそれぞれの気候の特徴を、九十字以上百字以内でまとめなさい。ただし、解答の中に①県名、②地形名、③気候の分類を含めること。

11.

傍線部(x)・(y)は、全く違う場面であるにも関わらず、全く同じ文が用いられている。これによってどのような印象を受けたか、百八十字以上二百字以内で書きなさい。

解答用紙

1.

(E)	(D)	(C)	(B)	(A)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
えて	き出す	つた	して	されて

2.

(1)	(2)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
..	..

(3)

(3)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
..	..
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥

3.

(3)	(3)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
型	型	型

4.

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
型	型	型	型	型

5.

(1)	(2)	(3)	(4)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..

6.

(1)	(2)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
根	岸	悠

先生が配ったプリントを見て、教室は一気にざわめき立つ。

「ええーっ!? 先生、これ、テストですか!? 数学とか英語とか全部入ってる……。これを今日一日で!」

「この問題を今日一日で解いて終わりのホームルームで提出して。相談は自由にしてもらっていいよ。でもまるまるおんなじ記述にはせんようにね。自分の言葉で書いてみて。ちなみに半分くらいは高校レベルの問題やから、分からんとこあっても全然大丈夫やで。ほな、楽しみにしとくわ」

先生の言葉に生徒たちは目を輝かせる。

「じゃあこれでホームルームとミニ授業終わります。ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

先生がミニ授業を終えたと、生徒たちは一礼した。拓也は冷静に状況を分析する。

「なるほど、総合問題か。これは一人で解くのは非効率のだな。相談が許可されているから、得意分野で役割分担するのが合理的だ。僕は数学と理科は担当できる。誰か、国語と英語が得意な人はいるか?」

海翔が面白そうに言う。

「はは、先生もえげつないこと考えるなあ。でも、これって俺らに『協力しろ』ってことやろな。それぞれの得意なことで、苦手なやつを助けてやれって。よっしゃ、面白いやん。やってやろうぜ」

竜二が面倒くさそうに言う。

「げっ、マジかよ……。朝から面倒くせえ……。……まあ、いいぜ。俺は見てやるから、お前らでさっさと終わらせろよ」

彼はそう言いつつ、問題用紙の特に国語の読解問題をじっと見ている。

「わ……。私、できるかな……。でも、相談していいなら……。拓也くん、数学、後で少し教えてもらってもいい……。？」

美緒が不安そうに言う。咲は問題を見て声を弾ませる。

「わー！ 問題がいっぱい！ クイズ大会みたいで楽しいかも！ 相談していいってことは、チーム戦だ！」

大輝は、静かに問題用紙の最後の、登場人物の心情を問う記述問題を、深く読み込んでいる。先生が教室を出ていくと、七人の生徒たちは、自然と机をくつつけ始め、この難題に挑むための作戦会議を始めていた。教室は、新たな挑戦への熱気と興奮に包まれている。

結論

ここに記すのは、あくまで現時点での結論である。るい先生と生徒たちが織りなす、答えのない問いを巡る対話の旅は、まだその途上だからだ。

本シミュレーションは、「正解探し」としての道徳授業を解体し、生徒一人ひとりが自らの思考で倫理的な問題と向き合う、新しい教室の姿を描く試みとして始まった。授業を通して、道徳とは記憶すべき「知識」ではなく、絶えず変化する状況の中で、自分自身の誇りを羅針盤として最適解を探し続ける、一つの「能力」であることが示された。

もちろん、本シミュレーションが描く教室には、理想化された側面も存在する。教師には極めて高度なファシリテーション能力が求められ、また、生徒たちが最終的には真摯な対話に応じるという前提に立っている。現実の教育現場が抱える、よ

り複雑な外的要因——たとえば、評価制度や家庭環境といった課題——については、本稿の射程を超えるものとして、あえて捨象した。

しかし、その限界を認めた上でなお、本稿が目指したのは、完璧な教育マニュアルの提示ではない。それは、道德教育が向かうべき一つの方向性を示す、ささやかな「思考実験」である。

願わくは、読者諸氏が、この教室での対話を追体験することを通して、他ならぬ自らの心に眠る「ものさし」に気づき、それを磨き始めるきっかけとならんことを。

鞠久 類

参考文献

- [1] https://doutoku.mext.go.jp/pdf/junior_high_school_moral.pdf
(『私たちの道徳 中学校』、文部科学省、二〇二五年九月一日閲覧)
- [2] <https://doutoku.mext.go.jp/html/basic.html>
(『道徳教育について』、文部科学省、二〇二五年九月一日閲覧)

本著では、「道徳教育」を批評するための題材として、文部科学省著『私たちの道徳 中学校』の内容を引用している。しかしながら、「引用の範囲を超えている」と判断される可能性も大いにあるため、現在、著作権処理を進めている。著作権処理が完了するまでは一般公開しないため、読者諸氏には、他者に共有しないよう、ご協力願いたい。

髓―理のない理性―

令和7年9月13日 第一版発行

著作者 鞠久類

発行者 ただの洋楽好き

著作権法上の例外を除き、本書のいかなる部分も、電子的または機械的な方法を問わず、無断で複製、転載、または情報の検索システムに保存することを禁じます。

Copyright © 2025 by Kunitiko Bessho. All Rights Reserved.